



喜

たぬき

多

き

新橋申込受付中

横丁

怪談

隆

ぼなし

斗

森宅哉はコンビニ帰りの裏通りをスクーターで軽快に飛ばしていた。Tシャツをはためかす初夏の夜風が心地よかった。

宅哉は高校入学を契機に義理の親の説得を開始し、学年末の成績をもって辛うじて原付免許取得の許可をもらうことができた。そうして第二学年の初めに念願の原付免許を手にしたのだった。

スクーターは義理の親からの借り物だが、こうして好きな時にスクーターを運転できるというのは何とも言えぬ悦びだ。やっぱり高校生活はこうでなくっちゃ。

宅哉は生まれた直後から親類の森夫婦に預けられていた。両親との記憶はなく、それが当たり前すぎて疑問に感じた事はなかった。だから自分の環境を特殊と思ったことはなかった。

人に勝るような才能は特になく、中肉中背で運動はどちらかといえば得意でない。いや、正確に表現すればまったく駄目。顔だって大人達は愛嬌のある顔とうまい表現をするが、数少ない友人達はそろって不細工と的確に指摘してくれる。性格も内向的な方だが、だからといってネットに詳しいとか、芸能に明るいということもない。そして成績は中の下だ。要するにまったく目立たない。

趣味はない。神社の境内でぼかんと空を見上げているのが好きだった。なぜかと問われてもよくわからない。なんとなくそこにいると落ち着いた。

ただ宅哉には優しい面があり、時折道ばたであわれな骸をさらしている動物たちがあれば、どんなに小さな動物だろうとその前で、

「ナンマンダブ、ナンマンダブ」

と手を合わせた。

とは言え、その地味さゆえ高校生活を楽しみ切れていない宅哉は一念発起。自分を変えるために免許を取ることにしたのだった。

宅哉はスクーターに大きな可能性を感じた。バイク仲間もできるだろうし、旅行にだって行ける。もしかしたら性格も明るくなり、彼女だってできるかもしれない。そう思うと、自然と顔がほころんだ。

ところが、あとひとつ角を曲がれば我が家というところでその事故は起きた。

生垣から猫が飛び出してきたのだ。全身真っ白なその猫は、ライトの輪の中で一瞬宅哉を見上げると事もなげに道路を横断していった。

宅哉は反射的にブレーキを握り締めた。直後に前輪がロックして滑りだした。それからアッと声を上げる間もなかった。立て直すこともままならず、宅哉は道路に投げ出

された。アスファルトの上を滑るスクーターの、ガリガリいう嫌な音がいつまでも耳に残った。

反射的に身を起こした。猫を探すと小憎らしい事に、生垣の中から、悠然と宅哉を眺めてから奥に消えてしまった。それから宅哉はしばらく呆然と横倒しのスクーターを眺める事しかできなかった。

「どうしよう」

どこかで鳴るクラクションの音にハッと、慌ててスクーターを起こしにかかった。スクーターを道路端に停めてから、ようやく怪我をしていることに気がついた。左掌と右肘を擦りむき血がにじんでいた。同じくジーンズの右膝も穴があき擦りむいているようだ。まあこれ位の怪我なら一週間もすれば治るだろうが、それよりスクーターだ。左側面に目立つ擦り傷があり、左ミラーは割れてしまっている。ブレーキレバーも折れてしまった。どこから見ても転んだことは明白だ。免許取りたてで猫相手に事故ったとなれば、義父が何と言うか考えるだけで恐ろしい。免許取り上げと言い出すかもしれない。ここは何としても隠し通さねばならない。幸い義父は忙しくてスクーターなど目に入らないだろうし、義母は機械には疎い。カバーでもかけておけば触りもしないはずだ。宅哉は暫く気持ちを落ち着かせてじっくり作戦を練ってから、再びスクーターに跨った。

そんな宅哉の姿を、さっきの白猫が生垣の奥でじっと見つめていた。宅哉が角を曲がって姿が見えなくなると、白猫もまたどこかへと消え去った。

宅哉は暫く店の前で逡巡していた。

バイト情報誌に書いてあった『若者の集まる店』という文句と店の雰囲気は今ひとつマッチしないのだ。店の名は『居酒屋たぬき』。柏木駅前『柏木横町』の一角にある居酒屋だ。

『柏木横町』は常磐線柏木駅の目抜き通りから、一本外れた商店街『柏木アーケード街』からさらに数本外れた横町だ。『居酒屋たぬき』を筆頭に、イタリアン・レストラン『ローマ』や、スナック『ミリオン』など飲み屋が連なる細い通りであるが、通りの入り口に掲げられた『柏木横町』の看板は風雨にさらされはがれ落ちてしまい、いつしか『居酒屋たぬき』が角地にあるせいで『たぬき横町』とも呼ばれるようになった。

飲み屋が連なるお陰で夜はサラリーマンで賑わうかといえば、多くの客は華やかな『柏木アーケード街』に吸い込まれてしまい、こちらまで足を伸ばす客はあまりない。どの店にも活気がなく寂れているために場末感がひしひしと伝わってくる通りだった。若

者たちが集まるというより、人生に疲れた男がふらりと立ち寄る、という言葉が似合う。

名前からして疑うべきだったのだが、他の店には知り合いが多く働いている。いつどこから事故の事が義理の親に知れないとも限らないので、敢えて知り合いがいなそうな店を選んだのだが、店の雰囲気は宅哉の期待とは程遠い。店の前の巨大な信楽焼たぬきはまだいいとして、古い樽だのサザエの殻だのお世辞にも綺麗と言えない雑多な雰囲気。今から面接の予定であったが、なにも好んでこの様な店で働かなくてもまだ選択肢はあるはずだ。ドタキャンは申し訳ないが、都合が悪くなったことにして逃げてしまおう。宅哉がそう決断し、スクーターを回転させようとした時だった、何かを目の端で捉えた。

樽の上に白猫がいた。

「あっ！お前はあの時の」

首を回しすぎたせいでバランスを崩した。足をついたものの反動がついたスクーターを簡単に立て直せるほど運動神経のよくない宅哉は、またしても猫のせいで地べたに転がる羽目となった。スクーターはといえば、無事だった右のミラーが派手な音で割れてしまった。

「くそう、また猫だ」

宅哉が毒づくと同時に居酒屋たぬきの引き戸が勢いよく開いた。居酒屋たぬきの入り口には戸口いっぱいの大狸、いや恰幅のいいオヤジが、前掛、ねじり鉢巻姿で立っていた。

「何だかすごい音がしたけど、大丈夫かい？」

「あ、はい。大丈夫です。ちょっとコケちゃって」

慌ててスクーターを起こそうとしていると、大狸が駆け寄ってきて手伝ってくれた。意外といい狸だ。いや人がいいというのが正しい。宅哉の心配をする店主は人当たりもよく親切そうであった。そんな店主を裏切るのは申し訳ないが、ここは何も言わずに退散だ。宅哉はスクーターに跨りエンジンをかけ直そうとスターターボタンを押す、がなぜかエンジンのかかりが悪い。そうこうしているうちに、店主が声をかけてきた。

「これ、君のじゃないの」

店主の手には生徒手帳。面接のために持ってきたものだ。転んだ拍子にポケットから落ちたらしい。

「あ、ありがとうございます」

「なんだ、第三高校じゃない。僕の母校だ」

「そうなんですか。奇遇ですね」

そう言って伸ばした手に生徒手帳はまだ乗らない。店主は懐かしそうに生徒手帳を眺めてからふと、

「あれ、君もしかしてバイトの子？」

宅哉は力無く手をおろした。白猫の呪いだと思った。もちろん白猫はとっくに姿を消していた。

店内は外見同様に煤けた感じだった。焦げ茶基調の調度品のせいもあり全体的に暗く、天井から下がる白熱電球の灯りが妙に眩しく見えた。テーブル席は全部で八つ。全て四人掛けで若者グループがわいわい騒ぐには不向きだ。テーブル席には出窓があり、障子はどれも黄色く変色しているか破れていた。六脚あるカウンター席の隅に小振りの座布団が二つあり、一つには片目のだるまが飾られていた。もう一つは何も飾られていない。なんとも中途半端だ。

店主はまるで信楽焼きのたぬきの様で名を高畑音次郎といった。高校生から見ればもうオヤジ以外のなにものでもない外見だが、見た目ほどオヤジではないのだそう。センスのかけらもない銀縁眼鏡と口髭。Tシャツでは隠しようのない突き出た腹に、いつでもたぬきと染め抜いた紺の前掛けを巻いていた。よく、

「それが大人ってもんだろう？」

と口癖を唱えた。

「じゃあ面接を始めようか」

宅哉はテーブルで音次郎と向かい合って座った。なるべく視線を合わせないようにと、じっと出されたウーロン茶を見詰めていた。

「今年高校二年生だよね。バイトを始めようと思った理由は何だい？ 何か欲しいものでもあるのかな？」

宅哉はついさっき割れたミラーを思い出し、唇を噛み締めた。

「いえ、別に」

店構えを見て働く気が失せたとは言いつらい。視線が泳いだ。

「部活は何かやっているのかい？」

「いえ、何も」

音次郎の顔がほころんだ。

「じゃあ、毎日でもバイトできるじゃないか。がっぽがっぽ儲かるな」

声を上げて笑う音次郎を、宅哉は醒めた目で見詰めた。今時「がっぽがっぽ」なんて言う奴はいないよ。音次郎が視線を合わせてきたので、思わず目を逸らす。そこで偶然

目に入った三角POPメニューに目を剥いた。

メニューにはこの店が「日本手酌の会」という訳のわからない会の会員である説明と共に、

『お得！手酌会セット五万円。ビール一本おつまみ一品付き』と目立たぬように小さな文字で書かれていた。『手酌会セット』なるものが何かは分からないが、通常居酒屋にあるまじき値段である。

ボッタクリ？

喉が干上がっていく。

だが、異常な値段のメニューは他にはひとつもなかった。これだけが異常なのだ。混乱で思考停止した結果、このメニューは間違いという結論になった。

「まあ、僕の後輩となれば断る理由は何もないな。是非明日から来てくれるかな」

「.....はい」

思考停止した宅哉にこれ以外の返事はできず、トントン拍子に面接は進み、明日からここで働く事になった。

『手酌会セット』については後日すぐに詳細を知ることになった。決してボッタクリではなかったが、宅哉はまさかそこに自分が関係するとはその時は夢にも思わなかった。

初出勤の夜、宅哉は緊張と憂鬱で能面のように表情が消えた顔で居酒屋たぬきの暖簾を潜った。格子ガラスの引き戸から漏れ出る灯りは居酒屋らしく温もりを感じさせたが、引き戸を引く瞬間は、どうして断ることができなかったのかと自分の弱さを呪った。入店すると客はまだ一組もいなかった。

「心配しないでいい。いつもこんな感じだから」

音次郎が笑顔で言ったが、心配なのはそんなことではなかった。『手酌会セット』が頭の中をぐるぐる回る。

宅哉の心配をよそに、音次郎が奥に声をかけた。音次郎の巨体で見えないが、誰か他にも人バイトがいるらしく靴音が近づいてきた。

宅哉の中で不安が勝手にその人物像を作り上げて行く。

「宅哉君。そういや紹介まだだったね。まあ、ほら、僕は仕込み忙しいからさ。だって、それが大人ってもんだろう？」

訳の分からない説明が終わるか終わらないかのうちに、その人物が音次郎を押しつけた。

宅哉の緊張が最高潮に達した時、目の前に右手が差し出された。

若い女性が目の前に立っていた。若いといっても宅哉からすれば大人で、憧れの対象

になるくらいだ。自然宅哉の背筋が伸びた。

「バイトの森宅哉君ね。待っていた。助かるわ」

目の覚めるような美人だ。ストレートの髪は長くしなやかで、細面の顔立ちと涼しげで切れ上がった眼によく似合っていた。ただ、その眼はあまりに涼しすぎて、墨で描く幽霊のようにどこか背筋をゾクッとさせる雰囲気があった。背丈は標準男子の宅哉と同じくらいだ。ハイヒールを履いたらさぞ映えることだろう。そしてわずかに口角を持ち上げたミステリアスな笑みが、見事に宅哉の胸を射抜いた。宅哉は初めてバイトに応募して良かったと心から思った。高校二年の夏が始まる。青春の夏。

「私は狸山レイコ。これから宜しくね」

ところが浮かれ気味の宅哉は早速失敗をしでかした。これがレイコとの関係を決定したと言ってもいい。

「あの、狸山さんって、変わった名前ですね。たぬき横町の居酒屋たぬきで狸山さん。月夜に腹鼓打ったりして、なんてね」

宅哉は言うてから軽く笑ったが、相手が全く笑っていないのにすぐに気がつき笑いを引っ込めた。

「私の名前が何か問題？」

「あっ、気にしていました？ すみません。何も問題はないです」

「レイコちゃん」

音次郎がすかさず間にはいるが、レイコはもう止まらない。宅哉の胸ぐらを掴んで言った。

「何あんた。ぶっとばされたいの？ この次に名前をネタにしたら、あんたの前歯をスクーターのミラーと同じみたいに叩き割ってやるから」

「レイコちゃんは昔シュートボクシングの高校チャンプだったんだ。殴られるとそういう痛いから気をつけてね」

全くフォローになっていない言を受け、宅哉は何度も首を縦に振っていた。高校二年の夏はこうして始まった。

最初の客は午後七時過ぎに現れた。赤銅色に日焼けした小男で、安いメニューを二つ頼み、日本酒をコップ一杯だけ飲んでしわくちやの千円札を置いて帰って行った。

そして暫くしてその客がやって来た。

男は入ってくると暫く店内を見回していた。初めてなのだろうが、居酒屋なのだから適当に座るなり何なりすれば良いのものを、どうして良いかわからぬと言った感じだ。年の頃は五十から六十。疲れきったサラリーマンという言葉が似合ったが、目だけが異様な光を帯び、追い詰められた動物を連想させた。やがて空いた席に腰を落ち着けると

、ビールと枝豆を注文したが、出されたビールには手もつけず、黙ってテーブルを見つめていた。いよいよ宅哉が不審に思い始めた頃、レイコが、
「追加が無いか聞いてきて」

と言った。

「えっ。追加ってまだビールに口もつけてないですよ」

「いいから」

「でも……」

「文句あんの？」

宅哉は恐る恐る男に声をかけた。

男は一度宅哉を見上げてから再び視線をテーブルに戻した。一分ほど宅哉は待っていたが、沈黙に耐えられなくなり戻ろうとしたところで、唐突に男に手首を掴まれた。

「手酌会セットを」

男が消え入りそうな声で言った。

「えっ」

「手酌会セットをくれ。ここは手酌会の店なんだろう。そうなんだろう。もう、俺にはここしかないんだ」

男が手を引っ張る。

「離して下さい」

だが男の力は思いのほか強く、宅哉が助けを求めるようにレイコを見るとすぐにレイコがやって来た。

「お客様。手酌会セットについては他言無用。宜しいですね」

男が何度も頷いた。

「分かりました。こちらへどうぞ」

レイコは男を連れてバックヤードへと消えて行った。去り際にレイコは宅哉にも釘を刺すのを忘れなかった。

「別にヘンなことする訳じゃないから、この事は誰にも言わないこと」

睨みつけられ頷くしかなかった。

「それと、絶対に覗かないこと。いいわね」

一体バックヤードで何が行われようとしているのか。覗くと言われれば益々気になる。

バックヤードは厨房の裏にあたり、椅子と小さなテーブルがあって休憩したり荷物を置いたりできるようになっていた。

そのバックヤードの突き当たりに一枚の扉があり、扉には『道場』と意味不明な札が貼られていた。音次郎に聞いたところ女子更衣室とのこと。もちろんそれ以上を追求する何があるはずもなかったのだが、レイコは『手酌会セット』を注文した客とその『道場』に連れだって引きこもってしまった。いかがわしい想像をするなという方が無理である。

宅哉の心境を察したのだろう。音次郎が声をかけてきた。

「レイコちゃんが言った通りヘンなことは何もしてないよ。ただ、人生相談に乗っているんだ」

「人生相談ですか？ 道場で？」

「そうだよ。他に場所がないからね。大人ってのは悩みが多いんだ。それが大人ってものだろう？」

そうなのかもしれない。でもバックヤードで行われる人生相談に五万円というのがどうにも腑に落ちない。

「それにしたって五万円は高いって思ってるだろう。でもね、中にはそれ位必要な場合もある」

どんな場合なんだと考えていると、

「落とすのは結構大変なんだよ」

と音次郎が呟いた。

「落とす？」

宅哉は一つの単語に引っかかりを覚えた。

音次郎は暫く宅哉を見て思案していた。話すべきか止めるか考えているふうだ。悩んだ末に口を開きかけたところで、入り口の引き戸が開いた。来客が二人の会話を断ち切った。音次郎の口から出たのは別の言葉だった。

「いらっしやいませ～」

結局それから閉店間際まで客足が途切れず、宅哉はすっかりタイミングを失ってしまった。

宅哉は最後の客を見送るとバックヤードを覗きに行った。まだ『道場』の扉は閉ざされていた。戻ろうとしたところで、獣じみた唸り声ともつかない声が聞こえた。これでヘンな事をしていないと言われても説得力がない。

と、唐突に扉が震え大きな衝撃音がした。中で獣でも暴れているかのようだ。そしてバックヤードが薄暗くなったかと思うと、気温が一気に下がった。明らかに普段と違う空気に、宅哉はここにいてはいけないと強く感じたが、足が震えて一步も動く事ができなかった。

すると扉の『道場』の文字の下あたりがぼんやりと明るく染まり始めた。そしてゆっくりと青白い光がしみ出し始めた。その光はやがて拳大の大きさとなってバックヤードをふわりふわりと浮遊し、宅哉の目の前を通りすぎると厨房へと消えて行った。光の玉が消えてしまうとバックヤードはいつも通りに戻った。蛍光灯のジリジリいう音がやけに耳についた。

宅哉が口をパクパクさせていると、急に肩を掴まれて飛び上がらんばかりに驚いた。音次郎だった。

そんな宅哉を見て音次郎は、
「大丈夫だから」
と頷いてみせた。

そんなことを言われても、今しがた目にしたものをどう捉えればいいのか分からなかったが、大丈夫と言われればそう思うしかなかった。音次郎に言われるまま、深呼吸を繰り返していると少し落ち着いてきた。

「でも、他言無用だからね。面倒は嫌だろう」

音次郎に連れられ、カウンターで水を飲んでいると男が出てきた。明らかに来店時と雰囲気違っていた。男の顔を見て、宅哉は音次郎が言ったのはこのことかと思った。

男はレイコと音次郎に何度も頭を下げ「これでやり直せる」といったことを口にして帰って行った。

先ほど目にしたものをどう考えればいいのか整理がつかなかったが、穏やかな男の顔が印象的だった。こんな寂れた『たぬき横町』でも色々な人が訪れ、何かしらを得て帰って行く。確かに若者が集まるバイトではなかったが、あの顔を見ればこういうのもありかもしれないと思った。

「宅哉。覗いてないわよね」

「だ、大丈夫です。覗いてません。ちょっとヘンな声は聞こえたけど」

暫くレイコは疑り深い目で宅哉を見ていたが、やがて、
「忘れなさい」
と言った。

三人が男を見送り店内に戻ろうとすると、何かが路上で動いた。同時に旋風が路地を駆け抜けた。

「あ、白」

「えっ」

レイコが慌てて膝丈のスカートを押さえた。

「.....猫」

スカートの裾を押さえるレイコの姿はいかにも若い女性そのものだった。

宅哉と音次郎はお互い顔を見合わせた。二人の間で無言のやりとりが一瞬あった。宅哉はここで上手くやっていけそうな気がした。白猫は悠然と闇に溶けていった。

同じ頃、終電も無くなった柏木駅をぐるりと取り巻く連絡通路に一人の男が佇んでいた。

柏木駅は茨城県を縦断する常磐線の駅で比較的大きな駅ではあるが、駅前の繁華街は十分も歩けばおわり、その先には広大な住宅街が広がっている。更に先に行けば米どころらしい田園風景を臨むことができる。終電の頃合いには帰宅を急ぐサラリーマンと迎えの車で一時的に混雑するが、それを過ぎれば閑散とした雰囲気となり、ベッドタウンであることを嫌でも痛感する。夜通し光るネオンも無いではないが、閑散とした雰囲気は却って寂しさを増長していた。こんな時間に出歩いてもお愉しみは限られ、駅前を徘徊する人も今はいない。シャッターを閉ざした駅ビルはさながら墓石だ。

そんな時間の止まった街で、男は一人街を見下ろしていた。

男は夏というのに長袖のコートを着込み、すっぽりとフードを被っていた。男は微動だにせずひっそりとした商店街を眺めていたが、やがて駅を背にして俯きがちに歩き始めた。フードの下から覗く口元には僅かに笑みが浮かんでいた。

そんな男に興味を持つ者たちがあった。この近辺でちょっとタチが悪いと囁かれる若者グループだった。

若者たちはふざけながらも、付かず離れず男について行った。もちろんそれは男が暗がりに迷い込むのを待っているのだ。

男は徐々に商店街から離れ人気のない方へと進んで行く。やがて線路沿いの静かな場所で男はふいに足を止めた。若者たちはここぞと男を取り囲んだ。

「おっさん俺たちとちょっと遊ばねえか？」

男が黙っていると、若者の一人が勢いよく男のフードをはだけた。男の顔を見た若者たちは一様に息を呑んだ。男の顔は一面何か文字が書き刻まれて真っ黒だった。若者たちに知識があれば、男の顔に刻まれた文字がサンスクリット語を逆さに書いたものかわかったかもしれないが、そんな知識があろうはずもなかった。男の首には大きな水晶をつないだ数珠がかけられていた。どういう仕掛けか水晶玉の一つ一つ全てに、小さく苦悶に歪んだ顔が映し出され、呪詛を込めた目で若者を睨めていた。

「な、何だ、コイツ。気味ワリイな」

「遊びか、いいな。誰か線路に飛び込むって遊びはどうだ」

男の言葉に引き気味だった若者たちの目に危険な光が宿った。

「ふざけるな。舐めてると怪我するぞこら」

一人がナイフを取り出すと、男の前で横一線に振った。ひゅっと空気が裂ける音がした。

男は表情ひとつ変えず、顔同様に文字で真っ黒な手を目の前に掲げた。素早く印を結ぶと何かを口の中で唱えた。男の両目が大きく見開かれ、呪文が速くなる。そして男の目は瞳孔が開き切った黒点となり、さらにその黒点は広がって底なしの黒い穴になった。

ナイフを持ち脅していた若者はその二つの穴に見入っていた。やがて表情が驚きと恐怖で歪んだ。徐々にだがナイフを持つ手が若者の首筋に近づいて行った。

「おい、テメエ何やってんだ」

男が印を変えると、叫んだ別の若者が唐突に線路脇のフェンスを登り始めた。

「体が勝手に。誰か止めてくれ」

残った若者が必死に仲間のナイフを持つ手を押さえていると、フェンスの向こうでどさりと人が落ちる音がした。

仲間の声が聞こえないのか、フェンスを乗り越えた若者はフラフラと線路に立ち入り、首が線路に乗るように身体を横たえた。

男はそれを見ると満足そうに笑い再び歩き始めた。

「線路からあいつ引っ張り出せ」

ようやく仲間からナイフをもぎ取った別の若者はそう叫びながら、取り上げたナイフを持ち男の背中に突進した。男の背中にぶつかった時、若者は妙に柔らかい感触に戸惑った。人の背中など刺したことは無かったが、こんな感触ではないだろうことは想像がついた。若者は手を見て絶叫をあげた。両の肘から先が、男の背中に空いた真っ黒な穴に飲みこまれて見えなくなっていた。そして引き抜こうとしても、強い力で押さえつけられ、引き抜くことができなかった。男の首がぐるりと回り若者を真っ黒な二つの穴で見詰めた。若者は急速に心が干上がっていくのを感じた。全ての希望や楽しい思いが穴に吸い込まれていく。そして黒いドロリとした何かが心の中を覆っていった。

やがて何か冷たくてザラリとした感触が手に触れた。若者は必死でもがいたが全く歯が立たなかった。それは手に絡みつки、闇の中から若者に向かって腕を這い上がり始めた。ついに肘を通り過ぎそれは姿を表した。赤い目をした大きな蛇が男の背中にある黒い穴から首を突き出し若者を睨んでいた。

「止めてくれ」

懇願を無視して蛇は若者の首筋に食らいついた。若者が悲鳴をあげると、狙っていたかのようにその口に自分の頭を突っ込んだ。若者の顎が割けんばかりに広がり、蛇はその太い胴体をどんどん体内に潜り込ませていった。完全に胴体が潜り込むと若者は地面に崩れ落ちた。体内で蛇が暴れまわるのか、時折跳ねるようにその身を動かした。

「ふふふ。遊びは楽しいだろう」

男は再び歩き始めた。男の胸で数珠玉の中の小さな顔たちが、ケタケタと笑い声をあげていた。男は二度と振り向くことは無かった。

夏本番。うだるような暑さの中、街の居酒屋は順調に売り上げを伸ばしていたが、街外れの『たぬき』はいつだって暇だった。そして『たぬき』の隣のスナック『ミリオン』も似たり寄ったりだった。もっとも『ミリオン』はどこにでもあるスナックで特殊な裏稼業はやっていない。それでも隣同士で何年も店を営んでいれば色々と気づくこともある。

ある夜、『ミリオン』のママ、鳳静子とホステスの立花アケミが開店前に連れ立って『たぬき』にやって来た。短い髪にちぢれパーマ、小柄でボリ्यूムのある静子と、カールした茶髪でスラリと背が高いアケミが並ぶと、何となくお笑い芸人に見えた。

「今日は調子はいかが？」

「貧乏暇なしさ」

いつも繰り返される挨拶を音次郎が返す。

「たまにはうちにも飲みに来てね」

「そうだね。静子さんもね」

いつだってこの繰り返しだ。

「あら、この可愛い子は誰？ねえ、安くするからうちに遊びに来てよ」

「駄目だよ。彼は未成年だからさ」

静子がばれないわよといたずらに笑った。

「それよりねえ……」

ちょうど静子が口を開いた時だった。

入口から背の高い男が入ってきた。

「やあ、こんにちわ。音ちゃん。水一杯くれよ。こう暑くちゃかなわない」

見れば額に汗した警官が一人立っていた。音次郎の高校時分の同級生、野上巡査であった。野上は警ら中よく店に立ち寄るのだ。

「水はいいけど、何だい手に持っているそれは」

野上の手には防犯ポスターが一枚丸められていた。

「ほら、最近何かと物騒だろう。我々も頑張っているがね。やっぱり市民の皆さんのご協力あってのものだからさ。こういうものを作って配っているんだ。店の端にでもちょっと貼ってもらえないかなと思って」

広げた防犯ポスターには、施錠の注意点と共に、下着泥棒が頻発していることが書かれていた。音次郎が皆のしている前でポスターを入口脇に貼ると、野上は派手な敬礼をして、ご苦労様と言って去って行った。

静子がポスターを見てため息をついた。何でもこのところアケミの下着が盗まれているらしいのだ。あまりに頻繁なためもう取られる下着も底をつき、取る物が無いと知った泥棒がどんな手段にでるか考えると恐ろしい。それで音次郎に相談に乗って欲しくて店を覗いたという次第だった。

だが、その手の相談ならば警察に届けるべきであり、音次郎やレイコの出る幕じゃない。ちょうど野上もいたのだし相談に乗ってもらえばよかったのだ。

するとアケミが口を開いた。

「それがね、警察はもう巡回を増やしているっていうし、もうできることはないんだって」

「ひどい話だね。それこそ野上に聞かせてやりたいなあ。どんな顔するだろう」

音次郎がため息をつく。

「それにね、元々ここに来たのは愚痴るためじゃなくてね」

しばらくアケミは下を向いて逡巡していたが、静子が割って入りそうなので、意を決して話しだした。

「下着が盗まれる度にベランダに動物の毛らしき物が落ちているの」

そして先日は夜中に、施錠した部屋の中に得体の知れない何かの気配を感じたのだそう。電気を点けたかったが、恐ろしくて身動きできないまま明け方まで過ごし、気を失うように眠ってしまった。それが夢だったのか現実だったのか判断できなかった。昼頃目が覚めて起き出してみると、部屋の中一面に動物の毛らしきものが散乱していたのだそう。もちろん全ての鍵はかかったままだった。こうなると警察では相手をしてもらえないのでここに来たのだということだ。

「ねえ、手酌会セット頼めば依頼は聞いてもらえるんでしょう？」

静子が畳み込むように迫って来た。

「うーん。どうかな。うちの領分じゃあない気がするけど」

「ねえ、いいじゃない。うちの娘が困ってるのよ。男らしくさあ、ほら」

身体の大きな音次郎も静子には弱いらしく押され気味だ。それでも首を縦に振らない。

するとアケミがハンドバッグから紙包みを取り出して広げた。そこには黄色みがかった薄茶色い毛の束が収められていた。

音次郎とレイコが思わず顔を見合わせた。

「分かったよ。僕らの領分かどうか分からないけど。やってみるよ。どうかなレイコちゃん」

音次郎がレイコをそっと見る。

「いいわ。任せて」

レイコは歯切れよく調査を請け負った。

「アケミさんが困っているなら手を貸さないかね」

宅哉には毛束を見た時の二人の挙動が気になった。二人は何かを隠しているように感じた。

「ありがとうレイコさん。助かるわ。なんだかアタシ気味が悪くて」

「気にしないで。それと一つだけ条件があるの」

一同がレイコを注目した。追加料金でもとるのか？

「部下を付けて。相手は男なんでしょう？用心棒つけなきゃ」

レイコの視線に、宅哉は身体中から力が抜けるのを感じた。部下ってなんだ。居酒屋のバイトに応募した覚えはあるが、探偵の部下をやるとは聞いていない。

「僕にレイコさんの用心棒が勤まる訳ないじゃないですか」

レイコは横を向き、なぜか音次郎が取り成す。

「手当はちゃんと出すよ。頼むよ」

「へいへい」

宅哉は気の抜けた返事を返した。

翌日、授業を終えると宅哉は『たぬき』でレイコと待ち合わせた。特に部活動もしていない宅哉は、レイコにしてみれば恰好の手下らしかった。

「さあ、行くわよ。アケミさんのアパートはすぐそこだから」

アケミのアパートはたぬきから徒歩五分ほどの住宅地の中にあった。宅哉からしてみれば、住宅地と繁華街がこれほど隣接しているとは驚きだった。これではいつ何時、酔っ払いが住宅地になだれ込んで来ても不思議ではない。酔っ払い製造現場で働く身としては少し反省するものがあつた。

アケミの部屋は鉄筋三階建の最上階にありダイニングと居室の二間の間取りだ。三階なのでベランダから入るとすればかなり身の軽い者の犯行である。運動神経が人並み以下の宅哉には、どうやったら三階までたどり着けるのかまったく理解できなかった。

「私が部屋に入るから、宅哉くんは庭で見張りをしてくれる？ 大家さんにはもう伝えてあるから大丈夫だと思う」

「見張りって、今日犯人が来るかどうかなんて分からないじゃないですか」

「来るわよ。欲求は限界まで高まっているはずだから」

そう言ってレイコは鞆を肩に掛け直した。宅哉はさっきからずっと気になっていたことを聞いてみた。

「その鞆は何が入っているんですか？」

「数珠よ」

数珠にしてはやけに大きな鞆だ。小旅行に行けそうなサイズだ。

「それと、私の下着」

宅哉は聞かなければよかったと思ったがもう遅い。

「なんでそんな物持ってきたんですか」

「犯人をおびき寄せる餌よ。アケミさんのは盗まれちゃって数が少ないんだって」

無意識に鞆を引き寄せるレイコを見て、宅哉は何があっても見るものかと誓った。

宅哉が配置に着くとすぐに上から洗濯物を干すような細かな音が聞こえて来た。絶対に上は見るものかと宅哉が物陰から辺りを警戒していると、待ち兼ねたようにアパートを取り囲むブロック塀を乗り越える影があった。本当に来たことが宅哉にはにわかに信じられなかった。毎日様子を窺っているのだろうか。

小柄な男で、年の頃は四十から五十の間くらい。赤銅色に日焼けして細かいしわが刻まれた顔に見覚えがあった。店に何度か訪れたことのある男で、いつも気だるそうに日本酒をコップで飲みながら安いつまみを食べて帰る。会計に出す札がいつもしわくちやでだらしない印象であった。軽やかな身のこなしで塀を乗り越える様から身体を使う職業であることが窺える。こうなると確かに、いくら元高校チャンプでも一人より二人の方が安心である。

男は辺りを警戒するでもなく一階のベランダによじ登り、二階ベランダに手をかけると難なく身体を引き上げ、あれよあれよという間に三階ベランダに到達してしまった。

宅哉は慌てて階段から三階に駆け登った。

「レイコさん。大丈夫ですか」

宅哉が扉を開けて飛び込むと、まさに男の顔面にハイキックが炸裂する瞬間だった。

男は強烈なキックを浴びて崩れ落ちた。

レイコはすかさず背中に馬乗りになり、後ろ手を捻り上げた。

男がとても人間とは思えない悲鳴を上げる。これで決まりと思われた。

ところが安心していられたのも僅かだった。

男は口から泡を吹き血走った目を宅哉に向け猛烈に暴れ始めた。後ろ手を取っている筈のレイコが振り落とされそうになる。

「宅哉。鞆から数珠を取って」

鞆は居室兼寢室の小さなテーブルの上に置かれていた。

「早く」

レイコが叫ぶ。

男がレイコの手の内で獣のような唸り声を上げた。その度に床を蹴る音が響いた。男が逃れようと猛烈にもがいているのが分かった。

宅哉は鞆に手を突っ込んだ。すると白を基調とした下着に触れた。慌てて手を引っ込める。そういえば下着を持ってきたと聞いたばかりだった。見た感じではどこにあるかわからない。

「何してる。逃げられる。早くしろ」

レイコが男を必死で押さえながら怒鳴った。

もう悠長なことを言っている場合ではない。宅哉は鞆を逆さにすると中のものを全て床にぶちまけた。すると重たげな音をたてて黒光りする大きな数珠が床に転がった。マスカット大の黒曜石に梵字が刻まれている。それを手渡すと、レイコは手に二重に巻きつけ、怒りでもぶつけるかの勢いで経を唱え始めた。

経を唱える度に男が苦悶の雄叫びをあげる。その壮絶な身悶えは時にレイコを跳ね飛ばしそうになる。言われるでもなく宅哉は男の脚に飛びつき、満身の力で押さえつけた。レイコの汗が飛び散り、経と雄叫びが部屋に飴した。何時の間に曇ったのか、気温が下がり夕立ちの雨礫が窓を叩き始めた。薄暗い部屋の中で異様な叫びがもつれ合う影と渾然一体となり溶け合う。レイコが振り上げた数珠を男の背に打ち付けると、男は最後の絶叫を絞り出しやがてぐったりとして床に突っ伏した。宅哉の腕が一気に軽くなった。

男が僅かに痙攣すると、口から押し出されるようにして何かが出て来た。ぬらぬらとしていて、薄暗い部屋で青白く揺らめくような光を発している。長い鼻を持ち挑むような目が宅哉たちを睨みつけていた。頭を何度も振り、なんとか男の身体から逃れたそれは、やがて、粘つく液体を滴らせながら完全にその姿を現した。手足を伸ばしたそれは狐の姿をしていた。

「レイコさん」

その言葉に反応したかのように、青白い狐は宅哉の方を向いた。

目が合った。宅哉は本能的にまずいと感じた。殺られる。

宅哉が反応するより早く、狐は宅哉に飛びかかった。

「宅哉くん」

レイコの叫び声が遠くに聞こえた。その後は何も分からなくなった。

気がついたら床に仰向けに寝ていた。

「大丈夫？ もう祓ったわ」

頭が少しぼんやりとする以外は特に身体に異常はないようだ。宅哉は何が起きたのかを思い出そうとしてみた。男の口から何かが出て来て、狐の姿になり、そして飛びかかれた。

そこまで思い出して反射的に身構えた。狐はどこにもいなかった。

「あれは一体何だったんですか」

「男に憑いていた狐の霊よ」

あの気味の悪い生き物が狐の霊？

かなり予想していたものと違ったし、襲われるとは思わなかった。だがレイコが祓ってくれた。

レイコが顔を覗き込んで来た。顔が近い。思わずどきりとする。

その様子を見てレイコが、

「大丈夫そうね」

と笑った。

宅哉は気恥ずかしさを隠すように辺りを見回した。

レイコの下着がまき散らかされた部屋に、宅哉と男が転がっていた。

それに気がついたのか、レイコが慌てて下着を拾い鞆に詰め込んだ。

「ところで」

宅哉は天井に目を向けつつ、どうしても気になる疑問をレイコにぶつけてみた。

「この間『手酌会セット』を頼んだサラリーマンも同じような狐だったのですか？」

根拠は何も無かった。ただ、あれも狐だという確信に近いものがあつた。

レイコはゆっくりと横に首を振った。その振り方が宅哉を不安にさせた。明らかに前回とは違う何かを宅哉も感じていたのだ。

「狐は狐よ。でも同じとは言えない。毛束みたいな『物』を残すのは簡単な事じゃないの。普通憑き物っていうのは、宿主の行動をそれとなく操作する程度が関の山。何かを残したり、完全にコントロールするには相当な霊力が必要になる。今回落とした狐

にそんな力はなかった」

「にも拘らず毛束を残した。霊力以上のことをした。あるいは何者かがそうさせたということですか」

レイコが頷いた。

「何かが起ころうとしているわ」

昨日のレイコと音次郎の妙な態度を思い出した。

それにしても狐と下着泥棒がどう結びつくのかわからない。レイコに尋ねると、要は欲求であれば何でもよいのだそうだ。基本的に人間には欲求がある。その欲求が負の側面を持っていれば、持っているほど、動物霊のいいなりになりやすくなる。つけいる隙が広がるからだ。

動物霊からすれば、自分たちより位の高い器に入りたがっている。位の高い器というのは人間のことだ。人間に取り憑けば動物霊たちも位が上がったように感じるができる。

元々この男には歪んだ欲求があり、狐がその隙に取り憑いたか、あるいは何者かが狐と男を意図して結び付けたか。男が負の欲求を満たせば満たす程、より強く取り憑くことになり、狐の欲求も満たされる。そうして行動がエスカレートしていき、やがて男は破滅を迎える。それを分かっている結びつけたのだとすれば、その何者かは悪意をもってそうしたということだ。まだその何者かの真意は分からないが、不安を感じるには十分であった。

やがて男が息を吹き返した。男はレイコたちを目にすると、平謝りに謝った。理由を聞けば、そもそも少なからず下着泥棒はやっていたのだそうだ。想像に難くない。ところがある時、マンションの塀を乗り越えたところで気味の悪い男に遭遇した。逃げようとしたが全身真っ黒な男の目を見た途端にまともに物を考えることができなくなった。その後のことはよく覚えていなかった。

「そいつの目がね、真っ黒な蟻地獄みたいだったんだ。逃げようと藻掻いても、どんどん引きずり込まれてしまう」

男は話ながら、真っ黒な男を思い出したのか、両腕を抱きかかえて細かく震えていた。

いずれにしても犯罪は犯罪だ。宅哉たちは巡査である野上を呼ぶと、男を引き渡し一件落着とした。

『たぬき』に帰ると音次郎がケーキを振舞ってくれた。アケミが差し入れてくれた物だそうだ。目抜き通りの『アルデル』という洋菓子店で買ったのだそうだ。目抜き通りと一言添えられたところが僅かに癪に障り、宅哉はろくに味わいもせずにケーキを機械的

に口に詰め込んだ。食べ終わったところで、なんで目抜き通りの店に対抗心を燃やしているのだらうとおかしくなった。もしかしたらこの店を気に入り始めたのか？

「ところで、どうだった？」

音次郎が尋ねるので、宅哉は仔細を説明した。

「下着がいっぱいで数珠が見つからない時はどうしようかと思いましたよ」

さりげない言葉に音次郎が反応した。

「下着？」

「えっ？ はい下着です」

「誰の」

「レイコさんのですけど」

音次郎はレイコの様子を伺いながら顔を寄せて来た。

「色は？」

宅哉も声を低くする。

「白です」

「おいそこ！」

レイコがカウンターの内から怒鳴る。手には包丁。

「ぶっとばす」

二人は黙って下を向いた。

『たぬき横町』には様々な人が訪れる。でも店は今日も暇だった。店の中では小さな爆発もあったが、熱気の引いた夜風は涼しく過ごしやすかった。

星降る空の下、そんな人間関係にお構いもせず、樽の上の白猫が大きなあくびをひとつした。

二 狗憑き

「新鮮な野菜を使うのがボクの性分というか、イタリアンでは重要なことなんだよね」

そう言って『ローマ』のシェフ越谷誠一はにこやかな笑顔をみせた。

『ローマ』は『居酒屋たぬき』のはす向かいにあるイタリアン・レストランで最近シェフが越谷淳平からイタリア帰りの誠一に世代交代し、『たぬき横町』にあつて徐々に人気を博し始めた店だ。ところがこの越谷誠一には僅かながら難があつた。

新鮮な野菜を使うのなんて、食品業界ではごく当然のことである。そのごく当然のことをまるで自分だけが実践しているかのように言うのがこの男であつた。確かにすっきりした顔立ちにしなやかな物腰。人を魅了する笑顔を持っていることは認める。背丈だって宅哉の頭一つ高い。それだけのものを持っていながら、人に嫌われる人間がいる。

越谷がそうだ。

そしてそういった輩に共通することがらは、嫌われていることに気がつかないという点だと宅哉は思っていた。現にレイコの冷たいあしらいに全く動じていない。

越谷は持っていたトートバッグからズッキーニを何本も取り出すとテーブルに並べた。

「レイコちゃん。取れたてのズッキーニ使ってよ。ズッキーニはオリーブオイルともトマトとも相性がいいから、使いやすい野菜なんだよ。ボクのオススメ」

どこの居酒屋でズッキーニとオリーブオイルを出すというのか。レイコが反応しないとすかさず話題を変える。

「それより、今度うちの店のワインリスト新しくしたんだよ。飲みにきてよ。レイコちゃんなら安くするからさあ」

いくら客でも軟派目的で来られてはたまらない。さすがに鬱陶しく感じたのか、レイコが反撃にでた。レイコは越谷の前に陶製タンブラーに並々と注いだ日本酒を置いた。「そうね。そのうち。でもうちは日本酒が売りだから、ぜひうちの看板飲んでいって。サービスでいいわ」

越谷の顔が僅かにひきつる。

「ああ、日本酒ね。レイコちゃん知っていた？ 日本酒とワインって共通点がいっぱいあるんだよ。特にいかにフルーティーさを追求するかなんてさ。ああ、いい香りだね」

持ち上げた手が僅かに震えているのを宅哉は見逃さなかった。越谷は日本酒が大の苦手なのである。

かなり苦勞して越谷は日本酒を飲み干した。飲み干したころにはすっかり出来上がっ

ていた。

「あとはあの始末の悪い酔っぱらいをタクシーに放り込むだけだから、宅哉くんもう上がってもいいわよ」

「大丈夫ですか？」

無論大丈夫に決まっている。何といってもレイコはシュートボクシング元高校チャンピオン。ひ弱なぼっちゃんなんて相手にもならないだろう。どちらかといえば、こんな男にレイコが惹かれやしないかを心配していた。どうしてこんな男に、という例は枚挙にいとまがない。女ごころを語れるほど宅哉は大人ではない。

越谷は先日引退したレストラン・ローマの元店主、越谷淳平の一人息子だった。イタリアで修行をしてきたらしいが、越谷淳平に言わせれば出来損ないだそう。店を任せるのは心配だが、心配ばかりしていても一人前にはなれない。体調が優れないこともあり、思い切って店を譲り渡したのだ。ところが単なるダメ息子かと思えば、越谷の店は意外にも繁盛していた。思い切ったリフォームも影響しているのだろうが、どうやら病み付きになるサラダドレッシングが要因のようであった。父親も気付かなかった適性があったのかもしれない。すっかり鼻の伸びた越谷は、次は嫁探しだとばかりに意気込んで『たぬき』にやってくるのである。

だが、レイコは越谷に興味はない。イタリアにもイタリアンにも興味がない。レイコのもっぱらの興味は日本酒で、ラベル集めを趣味にしているくらいだ。間違っても宅哉の前に日本酒が置かれることはないが、くどくどうんちくを聞かされることは年中だ。男は日本酒をぐいぐい呑めなければならないと信じている。子供の宅哉は問題外。大して酒が強くない音次郎も、日本酒嫌いの越谷もレイコの眼鏡に合うことはないだろう。

そんなレイコであるが、いくらレイコにその気がなくとも、あれだけ連日押し掛けられては、いつ何時間違いが起きないともかぎらない。宅哉にとって越谷は目下の宿敵であることに違いない。

とは言え、高校二年生男子が年上女性にできることなどたかが知れている。宅哉はもはややった思いを胸にスクーターにまたがった。

いざ発進しようとして宅哉は一度思いとどまった。慌てるとロクなことがないのは経験済みだ。辺りを見回す。白猫はどこにも見あたらなかった。

スクーターを走らせ、最初の角を曲がったコンビニの前に彼らはいた。駐車場があるというのに大きなスポーツタイプのオートバイ数台を無造作に路上駐車させ、道路の半分を塞いでいた。明らかな迷惑駐車だ。宅哉が気がついた時にはもう遅かった。高価そうなオートバイを避けるのが精一杯。反対車線に飛び出し壁にぶつかって見事に転

んだ。地面に転がった時に宅哉ははっきりと見た。塀の上を優雅に歩く白猫の姿を。思わず言葉が口をついて出た。

「またか。お前のせいだぞ。お前のせいでいつもこうだ」

オートバイの近くにたむろしている連中が宅哉を見て大笑いしていたが、宅哉の言葉を聞いた途端に笑い声が消え静かになった。

五、六人いる男たちがぞろぞろと宅哉の周りに集まってきた。

「おい、お前今何て言った」

「いえ、何も」

「嘘付け。聞こえたぞ。俺たちが悪いって言っただろう。お前俺たちに因縁つけるのか」

宅哉の頬が怒りで赤くなった。

「そうだお前たちが悪いんだ。それに因縁つけているのはお前たちだろう」

と言いたかったが、言えるはずもない。運動神経も並以下なら度胸も並以下だ。今の宅哉にできるのは赤くなって震えることだけだった。

「おい、こら。何とか言えよ小僧」

調子付いた男たちの言葉に嘲笑の含みが増え始めた。さんざん小馬鹿にする言葉を浴びせかけると、男たちの間から一人の男が歩み出た。ひどくやせて背の高い男で、黒いセパレートのライダースーツを身につけている。開いた胸に金のネックレスが光っていた。だが男の落ち窪んだ目から発する光は、鋭く寒気のするものだった。

「おい、お前。レースするか？」

何のことか分からないまでも、宅哉は身に危険が迫っていることを感じた。

為すすべのない宅哉を救ったのは、町のお巡りさん野上巡査だった。

「君たちそこで何をしている」

懐中電灯が宅哉と男たちを交互に照らした。

「あれ、宅哉くんじゃない。君たちはなんだ」

「俺たちは何もしてねえよ。コイツ勝手に転けたんだ。なあ」

一人が仲間に同意を求める。

野上のライトがオートバイを順に照らしていく。

「ずいぶんと乱暴な止め方だな」

野上が言うが早いか、分が悪くなったと感じたらしく男たちはさっさとオートバイに跨がり、轟音を轟かせて去っていった。

「大丈夫かい。夜はああいう連中もいるから気をつけるんだよ」

「はい」

野上はその返事を聞くと、ろくな検分もせずに自転車に跨がった。どうやら目的地は『たぬき』らしい。ということは目的はレイコに会うことだ。たった今、町の治安を守る守護神のように宅哉に感じさせた行動は、単に欲求を満たすうえで邪魔になる者を排除したにすぎない。角を曲がる時の野上は鼻歌まじりだった。制服で酒は飲まないだろうが、野上はいけるくちなのだろうか。

どいつもこいつも。宅哉は電柱に怒りをぶつけた。もちろん足が痛くなっただけだった。

翌日、宅哉が『たぬき』の前にスクーターを止めると声をかけられた。

「ずいぶんと傷だらけだね」

大きなお世話である。宅哉が振り向いてみると子供が一人宅哉を見上げていた。

子供といってもちょっと変わった雰囲気を持っていた。背丈はいかにも小学生といった感じなのだが、どこか大人びた雰囲気を持っていて年齢の判断がつけにくかった。子供らしからぬディップでとんがらせた髪型の下から覗く目がどこか醒めているせいかもしれない。人に声をかけたわりに自分はワイヤレスのヘッドホンで音楽を聴いている。三つに分かれたウェストポーチは全てはち切れんばかりに膨らんでいる。今時ゲーム機をいくつも持ち歩くのにこういうポーチが必要なのもかもしれない。驚いたことに腕には最新のスマートウォッチ。画面ではロックバンドのミュージックビデオらしき映像がちゃかちゃかと流れている。こんな小さな画面で見てなにが面白いのか。

さらに迷彩柄のズボンにリズムを取る足には子供らしからぬ編み上げのごついブーツ。足許にはスケートボード。しかも小型エンジンが付いた自走式である。こんなもの公道で乗ってもいいのか？どこから見ても普通の小学生ではない。

「なんだお前」

少年はそれには答えず、さっと手紙を差し出した。

「これ、渡しておいて」

宅哉が受け取ると表に綺麗な楷書で、

《狸山レイコ様》

とかかれていた。宅哉は顔が熱くなった。このガキ。

何かを言う間もなく、少年はスケボーのエンジンをかけると優雅な身のこなしで走り去っていく。

「おい、ちょっと待て」

追いかけてようとして、運動神経が並以下の宅哉は蹴つまずいた。

「何やってるの？」

無様に転がっている宅哉に声をかけた主はもちろん手紙の受取人だ。

「あ、レイコさん。あの、これ。子供が渡してくれって」

しどろもどろに答える宅哉。これじゃあさっきのガキの方がまだ大人っぽい。

「子供？ 子供に知り合いはいないわ」

店に入ると、音次郎が暴走族同士の争いについての新聞記事を見てぼやいていた。

近頃暴走族同士が建設を中断した橋で危険なレースを繰り広げ、多数怪我人を出しているといった記事だ。暴走族同士が勝手に潰し合いをするのはいいが、徐々にエスカレートしており、いつか死人が出るのではないかと危惧されていた。

「こういうのを止めるのが大人の役割だよ。だってそれが大人ってもんだろう？」

二人とも相手はしなかった。音次郎のこういう態度はいつだって格好付けでしかない。社会貢献とはおよそ無縁の人なのだ。

「それで、さっきの手紙は何ですか。ラブレターか何かですか」

宅哉がやや無然として聞いた。

「何。ラブレター？」

音次郎が新聞を放り出してやってきた。

レイコは手紙を広げると一通り眺めてため息をついた。そこには整った文字で、
《挑戦状

お前に挑戦する。今度は逃げるな

並木恋太郎

》

と書かれていた。

「どういう意味ですかこれは。今度は逃げるなって。それに並木恋太郎ってさっきの子供ですよ。こんな手紙を寄越すなんて何者なんですか？」

宅哉の問いには応えず、レイコはくるりと踵を返すと、険しい顔でバックヤードに引っ込んでしまった。すぐに机を叩く大きな音が響いた。

音次郎を見れば、これまた苦り切った顔つきだ。

「参ったな」

「ちょっと、どういうことか教えて下さいよ」

宅哉がしつこく尋ねても、音次郎はうんうん唸るだけで答えない。

「大人には大人の事情ってもんがあるんだよ。だって、それが大人……」

「もういいです」

宅哉は憤然と言うと表に飛び出した。恋太郎が去っていった方角を眺めたがもう姿を認められるはずもない。その日はとうとう最後まで気が晴れることはなかった。

宅哉はシャープペンを置くとため息をついた。一向にはかどらない宿題を前に、宅哉のもやもや感はどんどんと膨らんでいた。大人たちは宅哉に何も語らない。宅哉の気持ちを置き去りにしていた。レイコの態度もまた宅哉を悩ませた。子供なのは分かっている。でも子供扱いにはうんざりとする。すっきりせず苛々だけが募って行く。不安が疑念に変わり、疑念はまたしても不安を引き出す。止められないサイクルで胸が圧迫され充電し過ぎの電池みたいに熱くなる。そんな自分に耐えきれなくなり宅哉は夜の街に駆けだした。

スクーターであてどなくうろついていると、いつしか河川敷の工事現場に着いていた。暴走族が危険なレースを繰り広げてニュースになった場所だ。いつまた連中が現れるとも限らない。ここは退散しようと思った所で、車の音が耳に入った。工事現場の奥からこちらに向かってくる。宅哉は物陰に身を潜めて車をやり過ごした。宅哉の目の前を通過していったのは、見覚えのある真っ赤なイタリア車だった。アルファロメオ・ジュリエッタとかなんとかいう車だ。何度か『ローマ』前の路地で、越谷がこれ見よがしに停めているのを見たことがあった。

なんで越谷が？

疑問に思うも、奥で男たちの声が聞こえる。もちろんこんな夜にこんな場所でたむろしているのは、記事になった連中に違いない。宅哉はスクーターに跨がると、その場を後にして越谷の後を追った。

二人が走り去った後の工事現場の一角で、フードを被った一人の男が成り行きを見守っていた。男の顔には黒い逆さ梵字がびっしりと刻まれていた。男は宅哉たちが去った方向を見てから、暴走族がたむろするプレハブを眺め、満足したように笑った。男の笑いに合わせて、胸の辺りから小さな笑い声がけたけたと起こった。そして男は静かに闇に姿を消した。

明かりの落ちた『ローマ』に付くと、越谷はあたりを伺いながら建物の間の路地を抜け、裏口から中に消えた。

宅哉は自分のやっていることが誉められたことではないと認識していた。それでもど

うしても止めることができなかった。そっと『ローマ』の裏口ドアノブを回し、慎重に扉を開き中を伺う。奥の厨房から明かりが漏れているのが見えた。音を立てないよう息を殺しながら厨房まで向かった。越谷は暴走族に会ったあと、一体レストランで何をしようというのか。厨房の扉の窓から中をのぞき込むと越谷の背中が見えた。そして調理台の上には小袋に小分けされた白い粉。あまりの驚きに宅哉の喉が鳴った。

「誰だ」

越谷が振り向いた時、宅哉はもう出口に向かって駆けだしていた。

「待て」

越谷が厨房から飛び出してきた。

宅哉が路地から飛び出し、スクーターに跨がると、目の前を何かが横切った。

同時に『ローマ』の裏口が勢いよく開き、越谷が飛び出してきた。

捕まる。宅哉が思った時、後方で悲鳴が上がった。見ると、越谷の顔に白猫が飛びついて爪を立てている所だった。

「いててててて」

越谷と白猫がもみ合っている隙に宅哉はスクーターを発進させた。ミラー越しに逃げる白猫と、呆然と立ち尽くす越谷が見えた。

翌日、たぬきに行くと音次郎とレイコが同時に振り向いた。どちらの顔も思い詰めた表情をしていた。

「どうしたんですか」

宅哉が尋ねると、二人はそっと横に退いた。すると二人の陰から現れたのは越谷だった。

「あっ」

思わず逃げ腰になる宅哉。だが越谷はテーブル席からただ呆然と、血の気のない顔で宅哉を見上げるだけだった。宅哉は何を言えばいいのか分からなかった。

「いま越谷さんから相談を受けていたのよ」

「ああ、もう。僕はどうすればいい」

越谷が頭を抱えた。

「そうね。手酌会セットかしら」

「えっ？越谷さんに何か憑いているってことですか」

「ええ。たちの悪いのが」

レイコは暫く腕を組んで考えていたが、やがて思い立ったように拳で手のひらを叩いた。

「あれこれ考えても仕方ない。今夜行ってみましょう」

「行くってどこへ？」

宅哉が聞くと

「工事現場に決まっているでしょう」

とレイコの快活な返事。

「たちが悪いのって、まさか暴走族のことじゃないですよね」

「そのまさか」

レイコがシュートボクシングの元高校チャンピオンだったとしても、暴走族相手にいくらなんでも無謀すぎる。宅哉がそう思っていると、音次郎も同じ意見だったようで、

「レイコちゃん一人じゃ危ないよ」

と言った。ところがレイコはしれつと答えた。

「一人じゃないわよ」

視線の先にはもちろん宅哉。

「それなら、まあいいか」

音次郎が妙に納得顔になる。

いい訳ないだろう。宅哉が抗議を始めようとする、音次郎に肩をばんばん叩かれた。

「色は付けるから。レイコちゃんを頼んだぞ」

宅哉は震えるほど怯えていた。これから夜の工事現場で、地元暴走族のたまり場に一人乗り込もうというのだから無理もない。暴走族は『ジャッカル』といい、小規模ながら昨今新聞をにぎわしている荒くれ者である。ことにリーダーである景山力は命知らずで有名だ。今までの危険なレースも全て景山が相手を下している。そんな連中を相手に何をされるか分かったものでない。いやそれどころかこちらから喧嘩を売ろうというのだから、何かされるに決まっている。されない方がおかしい。生きて帰れないかもしれない。宅哉は自分が涙ぐんでいるのが分かった。

ならばなぜ断ってしまわなかったのか。なにもこんな危険を冒さなくても、自由な高校二年生の夏は謳歌できるはずだ。ところが音次郎の一言が全てを決定してしまった。

宅哉はジャッカル連中に面が割れている。彼らは宅哉を忘れないだろうし、規模が大きくなってから絡まれるより、今のうちに決着を付けておいたほうがよいというのだ。

決着って何の決着なんだ？

大きな疑問はあったが、大規模暴走族に絡まれている自分を想像すると鳥肌が立った。精神的にその状況に耐えられるとは思えない。気がつけば頷いていた。

あの時の音次郎のだまし討ちのような言葉さえなければ、今頃は宿題を悩む程度の退屈な日常ですんでいたはずだ。大人は汚い。

遠くの暗がりでは懐中電灯の明かりが瞬いた。レイコがスタンバイした合図だ。そして宅哉に行けという命令でもある。もう後には引けない。

と、状況はヒーロー映画のようであるが、現実はいまいかない。なにせ宅哉ときたら足がすくんでまったく動けなかった。何分間そうしていただろうか。一度催促なのか激しく揺れる明かりを見た気がする。それでも動けずにいると、後ろから声をかけられ、驚きで飛び上がった。

「お前、何してるんだここで」

暴走族仲間の一人だった。

宅哉は頭の中が真っ白になり、計画は瓦解した。

レイコによれば、そもそも憑き物落としが必要なのは越谷ではなく景山であるという。なぜならば、景山のスピード狂いの行動は狗憑きの症状そのものであるからだ。狗はスピードと相手の恐怖を好む。だからレースを何度も繰り返し、スピードに酔いしれながら、相手の恐怖を吸い取って成長しているのだそうだ。このまま行けば景山は、相手が死ぬ直前に感じる本物の恐怖を味わわねばいられなくなるだろう。それはもうスピードとは何の関係もなくなる。ただ、死の恐怖をむさぼる怪物になってしまう。だから景山から狗を落とさなければならず、景山を引きずり出す必要があった。そのためにはレースが一番確実だった。

計画はこうであった。

まずは宅哉が景山に先日のトラブルに大して詫びを要求する。もちろん突っぱねられるので、それならばレースで勝負をつけようと提案するのだ。その理由は宅哉がスクーターを持っているからという、ただそれだけの理由だ。

こうしてレースに乗ってきたならばあとは簡単。レース場となる建設中の橋の途中にレイコが待ち伏せして景山から憑き物を落とすという計画であった。

よく考えればこんな穴だらけの素人計画が成功するはずもなかった。どうしてあそこで頷いてしまったのか、宅哉は涙を流しながら激しく後悔した。

そして引きずられるようにプレハブに連れ込まれると、驚いたことにレイコがいた。後ろ手に結束バンドで縛られている。

「だってしょうがないじゃない。頭から袋を被せられちゃったんだから」

あの時見た光は催促なんかではなく、レイコが捉えられた時の光だったのだ。相手が

見えなければ、さすがのレイコも手も足も出ないということだ。宅哉は世界が崩れ落ちるのを感じた。免許を取って高校二年生の夏を謳歌しようなどと、身の程をわきまえぬ夢を見たのがいけなかった。そうすればバイトをすることもなかったし、こんな最悪の状況も味わうことはなかったのだ。

「さて、おもしろい客が二人も来てくれた。どうしたものかな」

プレハブの奥のソファから男が一人立ち上がった。ひどくやせて背の高い男だった。見覚えのあるその男こそ景山だった。

景山はしばらく宅哉を見ていたが、ふと笑い始めた。

「お前、あのときの小僧か。何しに来たんだ」

宅哉は黙って下を向いた。口が避けてもレースをしにきたなどと言えない。

ところが、どういう考えなのかレイコが口を挟み、余計なことを言った。

「この子あんたとレースをしに来たのよ」

「レイコさん。何てことを言出すんですか」

今更レースをやることに何の意味があるのか。

「何だって。レースだと。あのスクーターでか？」

男たちがどっと笑った。無理もない。だが、景山は仲間とは違った薄ら笑いを浮かべた。

「お姉ちゃん。威勢がいいね。嫌いじゃないぜ。そういうの。でもあんた立場を分かってないだろう。どうだい。俺とあんたで、男と女のレースをやってみるかい？」

宅哉は血の気が引いていくのが分かった。景山の言うレースが何を意味するのかが分かったからだ。

「あら。あんたそんなに強いように見えないけど」

レイコがまた相手を刺激するような言葉を吐く。

「そうかい。そんなに試してみたいか。」

景山がライダースーツの上着を脱いだ。

その時だった。

「大の男が揃って随分みっともない真似をするんだね。子供が見たって卑怯だってわかるよ」

驚いて全員が声の方を振り向いた。

プレハブの入り口に子供がいた。恋太郎だった。

「何だ。ガキか。ガキはお寝んねの時間だ。消えな」

「それよりさ。あんた。レースの挑戦は断らないっていうのは本当なの？」

景山は目を細めて恋太郎を見据えた。

「ああ。断りやしねえさ。ガキじゃなきゃな」

「ガキは何でだめなのさ」

「ガキ相手に本気出せるわけねえだろう」

恋太郎が「ふふふっ」と笑った。あまりに無邪気でまるで違った状況を想像してしまいそうな笑いだった。

「本気で負けたら困るもんね」

「なんだと」

恋太郎がスケートボードを掲げて見せた。随分と大きなエンジンが付いていた。よく見ればホイールもずいぶんと大きなものがついている。特別仕様だ。

「僕のボードは改造してあるから時速百キロは出るよ。もちろんハンデは付けてもらうけど負けやしないさ。どう勝負しない？それとも止めとく？」

景山が鼻で笑った。

「止めとくわ」

恋太郎も笑った。

「じゃあ、そういう事で」

恋太郎が帰らんと背を向けた。

おいおい、これだけ引っ掻き回してそれでおしまいだよ。宅哉は恋太郎に心底がっかりした。そしてわずかでも、こんなガキに期待した自分に対して猛烈に腹が立った。

「みなさん。ただいま『ジャッカル』の景山さんは僕に対して不戦敗宣言をしました」

誰に向かってしゃべっているのかと思えば、恋太郎は小さなカメラに向かって笑顔を向けていた。

「あ、今これSNSにライブ中継してるんだ。全国の人が見てるよ」

にわかに景山の表情が険しくなった。

「ふざけんな。おい、こいつを捕まえろ」

「じゃあ、勝負するかい？ 条件はこうだ。景山さんが勝ったらガキは前言撤回して家に帰って寝るよ。二人を好きに料理したらいいさ。でも僕が勝ったら二人を返してもらうよ。ハンデは百メートル。先に橋の突端にたどり着いた方が勝ち。どうする？」

好きに料理していいって、何を勝手に条件出しているんだ。ぶっ飛ばしてやる。後で必ずぶっ飛ばしてやる。だが、後では本当に来るのだろうか。宅哉の両頬をとめどなく涙が伝った。

「いいだろう。ただ、条件をひとつ追加する。俺が勝ったらそのボートをへし折ってやる。ガキは歩いて帰んな」

こうしてレース開催が決まった。ルールは簡単だ。橋の突端にレイコと宅哉が置かれる。二人の許に先にたどり着いた方が勝ち。アクセルは全開とする。先に少しでもゆるめたらその時点で負けとなる。賞品となったレイコと宅哉は建設中の橋の突端にある杭に縛り付けられた。二人の後ろから橋の突端までわずか一メートル。途切れた先は闇夜に横たわる真っ黒な川だ。水面までの高さは十メートル？ いや十五メートルか？ どちらにしても落ちればただでは済まない。風が吹いても落ちるのではないかと宅哉は気が気でない。二人の視線の先では恋太郎がエンジンの調子を見ている。その後方百メートルの地点で景山が改造された大型のオートバイでエンジンを吹かしていた。大地を揺するほどの排気音が宅哉の鼓膜をも振動させていた。

「レイコさん。どうするつもりなんですか」

「恋太郎に任せるしかないんじゃない」

素っ気ない回答は宅哉の全ての望みを断ち切るに十分だった。どう考えてもスケートボードで大型オートバイに勝てるはずがない。みんなでなんて馬鹿なことをやっているのだろうか。

宅哉たちの前に『ジャッカル』の一人が立ちはだかり、火の点いた発煙筒を高々と持ち上げた。いよいよだ。そしてその発煙筒を勢いよく振り下ろした。恋太郎のボードのエンジンが唸りをあげた。同時にその唸りを蹴散らす大音響で景山のオートバイが咆哮を上げた。

轟音で何も聞こえないと思っていたところに、レイコのつぶやきが聞こえた。

「遅かったじゃない」

白猫がレイコの脚にじゃれついた。そのまま白猫は後ろに周りレイコの手には咥えていたナイフを渡した。レイコは素早く手首の結束バンドを切り落とす。そして次に宅哉のバンドを、切らずに前に駆けだした。

「レイコさん。助けて」

宅哉の叫びも耳に入っていない。すかさずスターターの男に蹴りを入れて倒した。

前方では景山のオートバイがぐんぐんと恋太郎に近づいていた。肩を並べるまであと僅かだ。

恋太郎は音で距離感を測りながらポーチの一つに手を差し入れた。恋太郎が抜いた手から何か放ったのと同時に、景山が恋太郎を抜き去っていった。

「残念だったな。ガキ」

次の瞬間、景山のオートバイのタンクで強烈な光が炸裂した。恋太郎が放った光玉だ。

すぐ後ろで恋太郎は印を結び経を唱えていた。

「ぐおおおお」

景山が人のものと思えぬ悲鳴を上げる。だがスピードは落ちずかえってロケットのように猛烈な加速を始めた。景山は両手で頭を抱えて苦悶の絶叫をあげた。同時に景山の背中から青白く光る動物のような何かがぬるりと抜け出し、光玉の白い光を避けるようにオートバイの下側に潜り込んだ。光玉の光が消えると、その青白く光る何かは前後に伸び、青白い炎となってオートバイ全体を包んだ。景山がオートバイから転げ落ちたが、オートバイはますます加速してレイコに向かっていった。

「しゃらくさいわ」

レイコは護符を取り出すと、長細く丸め弓矢のごとく構えた。

「破」

レイコが覇気を放つと、護符矢が向かい来る炎に包まれたオートバイに向かって打ち放たれた。

ところがオートバイのスピードが早すぎて護符の矢は正面を僅かにそれてしまった。

「しまった。宅哉くん」

オートバイは宅哉めがけて突き進む。

「助けてえええ」

宅哉の前に白猫が立ちはだかり「ニャア」と一声鳴いた。

それに合わせて僅かにオートバイの軌跡がずれ、宅哉の脇を掠めて突端から真っ黒な川面に飛び出していった。

「助かった」

「まだよ。また来る」

レイコが再び護符を取り出した。

その脇に駆けつけた恋太郎が立つ。その手には競技用とおぼしきパチンコが握られていた。そしてポーチの一つからまた何かを取り出しセットした。それは数珠のひと玉であった。恋太郎が経を唱え始めると数珠玉は白い光を放ち始めた。

「来るよ」

「分かってるわ」

空中に飛び出したオートバイは川に落ちず、ぐるりと向きを変えて三人に向かってきた。強烈なヘッドライトの光が三人を照らした。

「今だ」

二人が同時に護符矢と数珠玉を放った。

空が割れたような音がしたと同時に、一瞬一切の光が消えた。

直後、橋の突端にオートバイが激突し、爆風が宅哉の全身を叩いた。

オートバイはその勢いで橋を震わせたものの、力つきて落下し、そのまま暗い川に消えた。

宅哉は爆風をまともに受け、意識が遠のいていくのを感じた。

「ばけものだ」

橋の途中にいた景山が逃げ出した。

「なんだ。狸山レイコも大したことはないね。もっと強いのかと思っていた」

「口だけは親譲りのようね。私がいなかったら全員丸焦げだってわかってるんでしょ。実在する最後の安倍晴明末裔。いつから並木なんて平凡な名前にしたの？」

「僕はそんな大昔の事なんて興味ないんだ。式神が使えるのが、未来が読めようが。そんなのは意味がない。式神なんて不運で片付けられちゃうし、未来予測ならコンピューターにだってできるんだから。あと百年もすれば、機械の方が正確に僕らの仕事をできるようになるよ」

「さあ、どうかしら。そうかもしれないけど、今はできないでしょ。それよりなんで挑戦状なんて形式ばったことするのよ」

「それが必要だったからさ。だってアイツは柏木にいるんでしょ？」

レイコの表情が硬くなった。

「知っていたの？ 私だって今日やっと確信が持てたところなのに」

「うちには独自のネットワークがあるからね。それより挑戦は受けてもらえるんだろうね」

「あなたがなり振り構わない行動に出たりしなければね。あなたのお爺さんのように」
恋太郎の顔が途端に陰しくなった。が一瞬の事だった。

恋太郎はひょいと肩をすくめてみせた。

「まあ、今日のところは引き分けかな。でも殺された祖父の敵は必ず取らせてもらうよ」

恋太郎はそれだけ言うと、静かに闇にとけ込んでいった。

「私は負けないわ。この血を絶やす訳にはいかないもの。そしてあいつも必ず倒す。この手で」

レイコは白くしなやかな手を見つめた。

「あの、僕も解いてもらえませんか」

感慨深げに立つレイコに意識が戻った宅哉が声をかけられたのは随分と後のことだった。

「あら、宅哉くん。安心して。もう終わったから」

レイコが涼しげに笑った。

それからすぐに『ジャッカル』は解散した。景山が薬物法違反で逮捕されたことがきっかけであった。景山については余罪もたくさんあるから、しばらくの間はおとなしくせざるを得ないだろう。逮捕された時の景山は見る影もなく、どうにも一帯を恐怖に陥れていた暴走族のリーダーには見えなかったそうだ。憑き物は完全に落ちたということだろう。

程なく宅哉たちの周りも騒がしくなった。レストラン『ローマ』の越谷もまた逮捕されてしまったのだ。逮捕のその日、野上巡査がレイコと音次郎に事情を語ってくれた。

なんでも、『ローマ』のドレッシングが異常に人気であった理由が逮捕の原因で、依存性のある薬物が混入されていたということだった。もちろん薬物の出所は景山である。レストラン繁盛のために越谷は不正な薬物を客に提供して、薬物効果でまた来店するようにし向けていたのだ。宅哉が見てしまった現場は正にその核心部分だったという訳だ。野上巡査がたびたびたぬきを訪問していたのも、商店街でいろいろ情報収集をしていたためのようであった。もっとも、宅哉からすれば、野上巡査のレイコを見る目は越谷のそれと一緒にだ。越谷がいなくなったとしても、決してこころ休まることはない。

そして景山や越谷が身を滅ぼす元になった、薬物の提供者もまだ見つかっておらず、すっきりとした解決とは言えなかった。

「それにしてもとんでもないイタリアンシェフだよなあ。客の健康を守るのがシェフじゃないか。それが大人ってもんだろう？」

音次郎が越谷の置いていったズッキーニを眺めながら言った。音次郎は日経ちしなびたズッキーニをゴミ箱に放り込んだ。

「落としてやれる人はまだいいけど、根が曲がってしまった人間は私にもどうしようもない」

レイコが寂しそうに言った。

「それよりも、あの夜見た白猫は一体何なんですか。レイコさんにナイフを渡していたじゃないですか。普通の猫にそんな事ができるわけがない」

「ああ、あれ。私の師匠」

レイコが飄々と答えた。

猫が師匠だって？ そんなことが現実にあるわけがない。馬鹿にされているだろうかと訝っていると、レイコが解説してくれた。

猫というのは本来大変靈感の強い生き物で、中にはその強さ故に人間以上に動物霊

を操ったり、長生きし知恵を持つものがあるのだそうだ。普通の人間にその区別を付けるのは難しく、逆に霊力のある人間の側に彼らのほうからやってくるのが大半だ。彼らはもとより獣の世界をよく知っている。だから機会あれば彼らと心通わせ、指南を受けることも多いのだそうだ。

とはいえ、宅哉から見ればレイコの師匠だろうがなんだろうが、疫病神以外の何者でもない。現に今回の事件だって、あの白猫のせいで巻き込まれたと言っても過言ではない。

異を唱えようとする、たぬきの入り口ががらりと開いた。

越谷が舞い戻ってきた、と思ったのも無理はなかった。越谷の父親淳平だった。

「この度は息子が大変な不始末を起こしまして、お詫びの言いようもない」

淳平は商店街全ての店に頭を下げて回っているようであった。

一通りの詫びを聞くと、音次郎が訪ねた。

「これからどうされるのですか？」

こう聞きたくなるのも道理だ。商店街というのは一店舗歯ぬけになるだけでも、ひどく寂しく見えてしまう。シャッターの効果というのは絶大だ。

「残念ながら、私も歳ですし。もう『ローマ』を復活させるのは無理でしょう。私の病気のこともありますし、空気のよいところということで、ここを離れて家内の実家に世話になることにしました」

「ほう。どちらまで」

「家内の実家が新潟で作り酒屋を営んでますので、そちらでお世話になろうかと思えます。私のいままでのワインの知識も少なからず役に立つようなお話も伺いましたので。実はワインと日本酒というのは似た点がたくさんあるのですよ」

そういつて笑った淳平の後ろで、レイコがひどくひきつった笑いを浮かべていた。もしかしたら何年かして、日本酒嫌いを克服した越谷が帰ってくるかもしれない。

淳平は話が一段落すると、次の店にお詫びをするために出て行った。

扉が閉まる間際に僅かな隙間を縫って店に侵入してきたものがあつた。レイコの師匠の白猫だった。

白猫はレイコの脚にまわりついたあと、優雅な歩みで店内を移動し、出窓に飛び上がった。一つだけ何も飾られていない座布団を見つけその上で丸くなった。「ニャア」と鳴いた白猫の表情だけは平和そのものだった。

男はホテルの窓から街の喧噪を眺めていた。男は全裸である。刻まれた逆さ梵字は隙間なく男の身体を埋めていた。暗がり立つ男は影と変わらない。男は今し方まで街で拾った女を抱いていた。女は男の顔を見た瞬間に恐怖の悲鳴をあげかけたが、真っ黒な奈落のような目に幻惑され、そして男の精を受け入れた。やがてこの見知らぬ女は、男からそそぎ込まれた精で、悪の華を咲かせることだろう。

それでいい。

男はこの世に悪の華が咲き乱れることを望んでいるのだ。それが男の望みであり、生きる目的だから。全てはあの日から始まった。人々が彼を拒絶したあの日から男は復讐の亡者となった。人々が己の胸に、欲望だけを抱えて生きると言うならば、それを叶えてやろうではないか。人の世が、犬畜生の世と変わらぬと言うならば、そこに引きずり下ろしてやろうではないか。それを男に示したのは彼ら自身なのだから。

男は服を身につけると、女を部屋に残したままロビーに降りた。

エレベーターが開くと、フロントの係員が虚ろな目で男を見た。

「チェックアウトでございますか。渡様」

どこか口調もはつきりとしない。

「そうだ」

「お支払いはどうなされますか」

渡と呼ばれた男の目が大きく見開かれた。瞳孔が広がり暗がり拡大していく。全ての光と意志を飲み込むような奈落そのもの。係員の顔からどんと生気が失われていく。

「お前が支払っておけ」

渡の胸で同じ言葉が唱和され、ケタケタと小さな笑いが起きた。

「かしこまりました。当方で負担させていただきます」

「あと、俺の事は忘れるんだ。きれいさっぱりとな」

渡は慇懃な礼をする係員を背に夜の街に出て行った。

入れ違いにカップルが入館してきた。カップルは渡の顔を見るなり息を飲んだ。

「やだ。気味が悪い」

二人はフロントで手続きをし、今見た事を係員に言った。

係員は、

「そのような方は存じ上げませんが」

と言った。彼の頭にはもう渡という男はいなかった。

係員がチェックインの手続きを済ませ、カードキーを渡しながら微笑みかけた時、カップルの女はふと係員の肩口に蛇を見たような気がして小さな悲鳴を上げた。恋人に問われた時、もうそこには何も見えなかった。

『居酒屋たぬき』は今日も繁盛していなかった。とはいえ、客の入りは良くはないが、悪くもない。いつも通りといったところだ。自然、従業員にも余裕ができる。

「それにしても、これで暫くこの界限も平和だね。暴走族がのさばり始めたときはどうなるかと思ったけど」

音次郎はまるで自分の手柄のように事を語っている。

「でもあの……」

白猫のせいでと言おうとして、宅哉は白猫の視線にぶつかった。猫のくせにまるで文句あるのかと言わんばかりの睨みを返してくる。猫眼力とでもいうのか。

「……事件のせいでしばらくバイトを辞められないですよ」

白猫はフンと鼻をならしてまた丸くなる。

人間の言葉が分かるのだろうか。宅哉は半信半疑ながら、レイコの師匠である事実を受け入れ始めていた。

「おいおい。宅哉くん。バイト辞める気でいるのかい？ 困るよちょっと」

困るという繁盛具合ではないだろうと思ったがここは言葉には出さない。

「元々、スクーターの修理代が欲しかっただけですし、ここにいると危ない目にばかり遭いますからね」

先日の暴走族の件で、宅哉は粗相をしそうなほど恐ろしい目に会った。二度とあんな目には遭いたくないというのが本音だった。だからいつバイトを辞めてしまおうかと悩んでいた。

「あら、宅哉くんが辞めちゃうと私も困るわ。宅哉くんの手助けなしじゃあ、もう手酌会セットは成り立たないもん。これでも頼りにしてるのよ」

ただレイコにこうにこやかな笑顔で言われてしまっては、到底辞めるとは言い出せない。それに自分のどこが頼りになるのか分からないが、レイコに頼りにされると言われるのは満更ではなかった。宅哉はレイコが立ち働く姿に見とれながら、やっぱりここでバイトを始めてよかったと思った。

「そういうのを嫌らしい視線って言うんだよ。知ってる？」

唐突に下から声がした。見れば恋太郎が醒めた目つきで宅哉を見上げていた。

「いっ、嫌らしいとはなんだ。失礼だろ」

「事実を言っただけだよ」

「大体、ここは居酒屋だぞ。ガキが出入りしていい場所じゃないだろ」

恋太郎はカウンターに勝手に座るとメニューを開いた。

「あんただってガキの内だろ。それに保護者同伴なら問題ないでしょ」

「保護者？」

恋太郎はすかさずレイコを指さした。

レイコの顔がひきつる。

「冗談じゃないわ。なんであたしがあんたの保護者なのよ」

「いいだろ。知らない仲じゃないんだし。母さんに、ここで適当に夕食食べてこいって言われてるんだ。これとこれちょうだい」

恋太郎はまったくレイコの言うことを聞く気がない。とても挑戦状をやりとりした間柄には見えない。音次郎を見ると仕方ないとばかりに肩をすくめた。

「いいよ。食べ終わったら僕が送っていくから。他人だろうが、何だろうが、大人が子供の世話をするのが道理だよ。だって……」

「それが大人ってもんだろう」

レイコ、宅哉、恋太郎の三人が同時に後を引き取った。あまりにうまくタイミングが合ったので、三人顔を見合わせて大笑いした。音次郎一人が慥然としていたが、結局音次郎も笑い始めた。

ふと、レイコと目が合った。ほんの一、二秒のことだった。でもそれは偶然とは言えない一、二秒だった。自然と視線が離れてしまっても、いつまでも心の奥底がほんのりと温かい一瞬だった。

平和だった。全てが平和だった。この時までは。

山口修平はほぞを噛んでいた。

「クソ。この台出ないじゃないか。インチキだぞ」

パチンコ台をどんと叩く。店員が訝しげにこちらを見ているが、それがなんだ。玉の出など本当はどうでも良かった。

山口は昼間のことを思いだしていた。まんまと後輩にしてやられた。いつの間に谷野派に寝返ったのか、山口の抱える融資先企業情報は全て谷野派に筒抜けになっていた。

『常総アセンブリー』への融資は賭けだった。山口ごとき次長クラスで決定してよい案件ではなかった。功を焦ったと言われればそれまでだが、これほど早い段階で後輩に見限られるとは思わなかった。こと出世競争に関して言えば、銀行は生き馬の目を抜く世

界だ。だからこそ派閥を組んでのし上がる必要があるのに、ここで蹴落とされればもう望みはない。先月に引き続いて今月も赤字決算となれば、融資責任者としては釈明が必要だ。どうする。

「クソ。出ねえぞポンコツ」

再び台を叩く。隣の客が音を聞いて舌打ちした。それにもイラついた。気分を変えようとタバコ手を伸ばしたところで背後にいる人影に気が付いた。

「あん？」

見上げるよりも早く、山口は両脇から二人の店員に抱きかかえられていた。

「おい、何しやがる」

「お客さん。困るんですよね。台をああ激しくたたかれちゃあ」

言いながら店員たちは山口を出口に向かって引き摺っていく。周りの客たちが面白そうに見ていた。そしてあっという間に路上に放り出されてしまった。人の流れが山口を避けていく。どの眼にも、出世競争から転げ落ちたサラリーマンという、憐れみの色が浮かんでいるように見えた。

「こんなことしてただですむと思ってるのか。俺を誰だと思ってるんだ。俺は……」

すんでのところで思いとどまった。山口はメガネを直し、立ち上がってズボンを叩いた。どいつもこいつも覚えていろ。こんな店ぶっ潰してやる。

その後山口は直帰ということにして、支店には戻らずに飲み屋で憂さを晴らした。いつもの店は後輩が来るかもしれないと思うと足が向かず、谷野派の連中も決して入らないだろうという店を選ぶうちに、『居酒屋たぬき』とかいう小汚い店に辿り着いた。いつもならば決して入らないタイプの店だ。どう考えても自分には不釣り合いな店。だが、今日の荒んだ気分にはちょうどいい。半ば自暴自棄的な気持ちで暖簾をくぐった。料理も店の雰囲気も褒められるものは何一つなかったが、店員の女だけは美人だと思った。

いい加減酔ったところで勘定をし、店を出たのは零時を回っていた。明日はまた仕事がある。しかも谷野派に寝返った後輩をどう叩き潰すかもじっくり考える必要もあった。そろそろ帰って休もうと思ったものの、ふらついてどうにも足元が覚束なかった。店を出てすぐに看板にぶつかって転んだ。

「くそ看板が！」

山口は看板を力任せに蹴飛ばした。

看板が派手な音をたてて倒れ、店からさっきの女店員が飛び出して来た。

「ちょっと、あんた何やってるのさ」

この店で唯一満足できる点だった美人店員も、この一言でゲス女に格下げだ。

「あんだと。客に文句つける気か？」

「文句があるから言ってるんじゃない」

「俺を誰だと思ってる」

「誰だっていいわ。次こんなことしたら誰だろうとぶっとばすから」

そう言って詰め寄ろうとする女を店主が押さえ込んだ。

「まあまあ、レイコちゃん。ここには色々なお客さんが来る。中には荒れてる人だっているさ。会社で嫌なことでもあったんだろう。だってそれが大人ってもんだろう」

なにが「会社で嫌な事があった」だ。なにが「それが大人」だ。知った風な口ききやがって。俺がどんな辛い目にあっているかお前ごときに分かるか。山口は唾を吐くと『たぬき横町』を家に向かって歩き始めた。どの店も煤けて衰れた。いつか俺がこの辺り一帯をぜんぶぶっ潰して再開発してやる。その時にどんな面するのがお楽しみだ。

勢いこんで歩き始めたがすぐに足が重くなった。公園のベンチにどっかと座り込み、途中で買った缶コーヒーを胃に流し込んだ。ひと息ついたところで、隣のベンチに人が座っているのに気が付いた。若い男だった。身なりからまともな職業の人間ではないと判断できた。とっさに財布の中身を計算した。殴られずに済む金額が残っているが、こんな連中に取りられるのは癪だ。山口はそっと立ち上がろうと腰を浮かせた。

「おい、オッサン」

チンピラが声をかけてきた。無視して立ち去ろうと歩き出すと、チンピラは俊敏な動作で山口の進路を塞いで立ちはだかった。

「な、何だ、お、お前は」

強がってみせたが、声が震えているのが自分でも分かった。身体の小さな中年銀行員と若いチンピラでは相手にならない。殴られる前に金を払ったほうがいいか。いや何か方法があるはずだ。考えろ。俺はエリートなのだから。

チンピラはにやけた表情で見ている。

「あんた、関東共和銀行の山口さんだろ」

「なんでそんな事知っているんだ。誰に聞いた。そうだ、分かったぞ。谷野派の連中だろう」

山口はどす黒い感情が膨らんでいくのを感じた。もう目の前の男が怖いとか、そういう気持ちは吹き飛んでいた。ただただ自分を陥れようとしている連中が憎かった。

「おいおい、慌てんなよ。谷野ってのが何者が俺は知らないが、あんたにとって損のない話を持ってきた。聞く気があるかい」

「ふん。信用できるもんか。帰って矢野に伝えろ。俺はまだ終わった訳じゃないってな

」

山口は男を避けるとしっかりとした脚で歩き始めた。もう酔いも感じなかった。

「高城龍五郎ってあんたところの顧客だろ？ つうか、あんたの客か？」

山口は足を止めた。

「何でそんな事まで」

確かに高城龍五郎は山口にとって大切な顧客だ。高城は柏木一帯を取り仕切る地主で、山口が次長になるきっかけを作ってくれた人物だ。山口にとっての生命線といってもいい。その高城のことまで知っているとなると、扱い次第でこの男爆弾になりかねない。

「話を聞く気になったかい」

山口はゆっくり頷いた。

男は、及川康治はほんと胸をなで下ろした。もし、この山口とかいう銀行員が話に乗ってこなければ、それは自分にとって終わりを意味する。そう、全ての終わりだ。

あの夜、あんな遊びをするのではなかったのだ。だがもうどうにもならない。俺たちは、俺はあいつの網に絡め取られてしまい為す術もない。ずきずきと胸の奥が疼き、頭痛もひどかった。苦痛は日々ひどくなる一方だ。そしてこの苦痛が永遠に続くなど考えたくもない。黒い顔の男が及川に乗り移らせた大蛇は暴れ及川を苦しめた。だが苦しみはそれだけに留まらなかった。大蛇は卵を及川の身体に産みつけた。今まさにその卵が孵化しようとしているのが感じられた。もしそんなことになれば、及川の身体は無数の蛇に食い尽くされてしまうだろう。

あれから数日して及川の許にあの男がやってきた。男は渡と名乗り、及川を渴いた眼で見据えた。それが及川に大蛇を思い起こさせた。及川は渡の胸ぐらを掴んだが、その力無い手はやすやすと払いのけられてしまった。

そして渡は及川にこう告げた。俺しかお前の大蛇を落とせる人間は存在しない。一週間以内にこの男を仲間に引き入れろ。そうすれば大蛇をなんとかしてやろうと。

もちろんそんな甘言に踊らされる自分ではないはずだ。だが他にどんな手段があるのか。自分に取り憑いた大蛇が卵を産み落とした。そんな戯言を誰が信じるのか。自分自信信じたくはなかったが、毎夜毎夜大蛇は夢に現れ及川を苦しめる。身体に巻き付き締め上げ、骨を一本一本砕いていく。その苦しみを一体誰が分かってくれるのか。及川に選択肢などあるはずがなかった。

「話って一体なんだ」

探るような目で見返してくる山口に、及川は切り出した。

「あんたと、俺とで高城龍五郎を食尽すんだよ」

及川は言ってしまうからもう後戻りはできないと思った。今日の前にいるこの男が警察に駆け込めば、それはつまり及川こそが大蛇に食尽されることを意味しているのだ。すべては吹けば飛ぶような眼鏡男にかかっているということだ。

ところが及川は山口の行動に呆気にとられた。

山口は怯えるどころか大笑いをし始めた。まるでこんなおかしい話は聞いた事がないとでも言いそう。考えてみれば当然だ。銀行員に向かって大事な顧客を裏切れと言っているのだから無理も無い。

唐突に笑いが止まった。そして向けられた山口の目を見て、及川は背筋が寒くなるのを感じた。山口の目はあの、渡の目と同じように乾いていた。

「なあ、あんた。銀行員にとって一番大切な物は何だか分かるか？」

及川は顧客と言いかけて止めた。それでは話がこじれるばかりだ。

「金か」

山口は不敵に笑った。

「金か。まあ、悪くない答えだ。だが外れだ。俺たちにとって一番大事なのは狡猾さだよ。

顧客？

そんなもんただの金の運び屋だ。誰が持って来たっていい。ただ、金庫に金を投げ込んでくれりゃいいんだ。

金？

金は力だ。だがそれを誰が使うかが問題なんだ。それを使えるだけの頭脳と、度胸と、そして狡猾さが必要なんだよ。それを持っている者だけがのし上がっていける。そして誰も逆らえない力を手にすることができる。一体銀行に逆らえる人間がどれだけいると思う。どこにもいやしない。世の中は銀行がなければ何一つうまく回らないようにできているんだ。そうだろう」

山口はそこまで一気にまくしたてると、手にしていた空き缶を地面に叩き付けた。そして怒鳴った。

「俺はその力が欲しい」

山口は及川の胸ぐらを掴み引き寄せた。明らかに自分より大きな男であったが、山口にはもうそんな事は見えていなかった。

「おい、お前。高城を食尽すと言ったな。もちろん考えがあるんだろうな」

及川は山口の手を振り払った。手が離れた今でも息が詰まりそうだった。

「俺の話に乗るのか」

「内容次第だ。勘違いするなよ。俺はお前など微塵も信用しちやいない。こいつは賭けだ。もし俺が賭けに勝ってのし上がれば、お前には相応の分け前をやろう。何せ支店にはどでかい金庫がおいてあるからな」

及川は首をさすりながら渡に伝えられた作戦を説明し始めた。話の内容を理解するにつれ、山口の目が喜びにつり上がっていった。

「いいだろう。駅前が高城の土地だ。まずはくそ汚い居酒屋をぶっ潰して小洒落たビルを立てようじゃないか」

山口が裏返った声で笑い出した。気味の悪い笑いだ。

及川ははっきりと分かった。及川に憑いていた大蛇が、山口をも取り込んだ。長い胴体が二人をぐるぐると巻き、最早逃れることは叶わない。救済の道などどこにもない。全てが狂っている。及川は心の奥底で悲鳴をあげ続けていた。

宅哉はジョッキに注がれたトマトジュースを飲み干すと、息を吐き出しどんとテーブルに置いた。目の前には宿題の山。そして宅哉はそれを『居酒屋たぬき』の空きテーブルでこなしているのだった。元々勉強をする場所を選ぶタイプではなかった。机があればどこでもいい。だからマックやコンビニのカウンタースペースで済ましてしまうことも多かった。どうせ今夜は『居酒屋たぬき』でバイトである。だったらいつそ家を経由せずに直行してしまえという訳だった。ジョッキトマトジュースは音次郎のおごりだ。

「それにしても何でお前がここで勉強しているんだ」

宅哉は目の前の席を陣取る恋太郎に言った。

「どこで勉強しようと僕の勝手だろ」

イヤホンでロックを聞きながら、宿題を進めながら同時に生意気なことを言う。器用といえば器用だ。

「俺はこの後バイトなんだよ。けどお前は何もないだろう。ガキは道草せずに家に帰れよ」

恋太郎はペンを置くと、今度はスマホで何かを操作している。

「あ、回答を教えてもらった。ラッキー」

宅哉が覗き込むと、誰かとチャットしているらしく、相手が回答を教えてくれたみたいだ。

「カンニングじゃないか。自分で解かなきゃ意味ないだろ」

「別に教えて欲しいなんて一言も書いてない。問題見せてって言うから教えてただけだよ

。そしたら勝手に答が飛んで来た。宅哉くんは降ってくる雨を止めることができるの？」

「雨じゃないだろ。スイッチ切れば済むはずだ。それに宅哉くんて呼んでいいなんて一度も言ってないぞ」

「ネットにつながってない機械なんてただの重しと変わらない。契約料が無駄じゃないか。宅哉くん！」

「お前！」

「あんたたちやる気あるの？」

唐突に上から怒りの声が降ってきた。レイコである。実はレイコは教員免許を持っている。宅哉がここで勉強をすることにした本当の理由がそれである。レイコに勉強を教わるという名目でレイコと一緒にいる時間を長くしようと目論んでいたのだ。それを目ざとく聞きつけたのが恋太郎で、宅哉の邪魔をしに来たというのが真相だ。

「恋太郎も恋太郎よ。なんであなたまでここで勉強するのよ」

「ほらみろ。怒られた」

恋太郎がふくれる。

「仕方ないだろう。母さんが今夜も夕ご飯はここで食べろって言うんだから」

レイコの顔がまた歪む。今夜も保護者代わりという訳だ。

「どういう母親なんだよ」

宅哉が考えもなしに口にした一言に、恋太郎の顔からすっと色が抜けていった。すぐに切り返しがくると思っていた宅哉は、うつむき気味に唇を噛む恋太郎を見てまずい事を言ったと悟った。

「お前に何が分かる。利用されているだけのくせに」

蚊の鳴くような声であったが、宅哉にははっきりと聞き取れた。

「おい、利用されているっていうのはどういうことだよ」

恋太郎は下を向いたまま答えない。

「おい、答えろってば」

「ちょっと、宅哉くん」

「その子の家は色々あってね。そう苛めんでくれ」

レイコと宅哉が驚いて声の方を振り向くと、杖を突いた小柄な老人が入り口に立っていた。和装にちょこんと乗せた小さな麦わら帽子がお洒落だ。その帽子の下には太い白髪 of 眉。好々爺然とした細い目がにこやかに恋太郎を見詰めていた。

レイコが「あっ」と声をあげた。そして宅哉に、彼がこの辺り一帯を所有する大地主の高城龍太郎だと教えてくれた。この建物のオーナーでもある。

すぐにバックヤードから音次郎が出て来て頭を下げた。どうやら高城は店子の売り上げを時々こうして確認して回っているようであった。その店子にたまたま知り合いの子供がいたという訳だ。

「お待ちしていました。こちらへどうぞ」

音次郎が高城を奥へ誘う。

高城はうむと鷹揚な受け答えをし、店内を観察しつつバックヤードへと向かった。そして姿が見えなくなる直前、初めて宅哉をまともに見た。そして高城の表情が一瞬驚きのそれに変わった。いかにも何かを発見したという顔だ。だが宅哉にはまったく見覚えの無い顔だ。驚かれる理由も分からない。

高城が口を開きかけた所へ音次郎の声がかぶさった。

「今月の収支報告なのですが.....」

高城は宅哉を気にしつつも奥へと姿を消した。高城に気を取られている間に、恋太郎はそそくさと帰り支度を始め、声をかける間もなく店を出て行ってしまった。宅哉は繊細な何かが壊れてしまった気がした。そしてそれはきっと、もう二度と元にもどらないのだという気がしてならなかった。

数日後、宅哉たちが店じまいをしていると電話の音が店に鳴り響いた。客のいない店で鳴る電話というのは、どこか不穏な響きを持っている。音次郎が電話に出るとにわかに顔つきが変わった。音次郎はしばらく相手の言葉を聞きながら頷いていたが、最後に二人を向かわせると言いながら、レイコと宅哉を交互に見た。

電話の相手は高城の妻だった。龍太郎の様子がおかしいというのだ。昨日から血走った目をして乱暴な行動を取り始めたのだそうだ。あまりに暴れるので、警察を呼んだが、不思議な事に警察が来るとすっとおとなしくなってしまう、おかしい様子は一向に見せない。そして夫婦の問題だから気にしないでくれと追い返してしまうのだそうだ。まるで何かに憑かれているかのような様子に、音次郎を思い出して連絡してきたということだった。

「でもあの高城さんが取り憑かれるなんてありえない。あの人は芯のあるしっかりした人なんだ。動物霊に取り憑かれるような人じゃない」

音次郎はしばらく考え込んでからぼつりと言った。

「まさかあのことと関係あるのかな」

宅哉の隣でレイコが身を固くするのが分かった。

「何れにしても、何か憑いているなら落とさなきゃならない。レイコちゃん。頼んだよ」

「ええ……分かった」

歯切れの悪いレイコの返事に、宅哉は違和感を感じつつレイコに続いて店を後にした。

高城家は柏木の中心値から離れ、利根川を見下ろすようにして建っていた。周りには畑が広がっているせいもあり、塀に囲まれた広大な敷地の一軒家はまるで砦のような印象だ。宅哉がインターホンを押すとすぐに応答があり、玄関から一人の老婆が現れた。妻の清子である。小柄でほっそりとしているが、背筋の伸びた姿は普段なら上品に見えることだろう。だが、清子の顔には明らかな怯えの色が見え、全体にやつれた印象であった。

レイコと宅哉が頭を下げると、屋内から奇声が聞こえてきた。

「一体どうなっているんでしょうか。もう怖くて、怖くて」

レイコに縋るようにする清子が顔をあげた際に宅哉と一瞬目が合った。すると清子は一瞬時が止まったような、惚けた表情を見せた。

「一刻を争う事態かもしれません。すぐに案内して頂けますか」

レイコの言葉に清子は我に返り、深々と頭を下げた。

玄関を入った宅哉は驚いて辺りを見回した。上がり框の幅は宅哉の部屋ほどの広さがあった。そして木彫りの龍があしらわれた豪華なつい立てが置かれていた。玄関について立てのある家など宅哉には初めてだった。

二人は清子に従いながら廊下を奥に進んだ。いくつかの部屋を通り過ぎ、一番奥にある重厚な扉の前で清子は止まると二人に向き直った。龍太郎の書斎である。清子の表情は一層固くなっていた。レイコがドアノブに手を伸ばしかけると、扉の向こうでガラスの割れる音がした。清子が小さな悲鳴をあげた。

レイコは清子の前に出ると扉を一気に開け放った。途端に本が飛んで来て壁に当たり大きな音をたてた。

「レイコさん。一体…痛てえ」

続いての本が宅哉の顔に命中する。

「うおおおお」

高城は完全に我を失っていた。先日の好々爺然とした雰囲気は嘘のようで、まるで罠にかかった獣のようだ。宅哉たちに向けた血走った目には知性のかけらも無かった。

「宅哉くん。私が気を逸らせるから後ろから組み付いて」

「は、はい」

さすがに老人相手にシュートボクシングの技を使う訳にはいかない。レイコは数珠を取り出すと高城に突きつけた。経を唱え始めると同時に高城の興奮も一層高まり、書斎にある物を手当たり次第投げ始めた。テーブルが倒され、窓ガラスが割れ、そして長年かけて蒐集したのであろう、見事な茶器もことごとく砕かれていった。

レイコは高城の正面から数珠を盾に近づいていく。

それを目の端で捉えながら、宅哉はそっと高城の後ろに回り込もうとする。

だがしかし、高城は動物的な勘ですぐにそれを察知し、立てかけてあったゴルフクラブを掴むと闇雲に振り回し始めた。とてもあぶなくて近寄れない、と思えば、レイコが動きの際をみて見事なハイキックでゴルフクラブを蹴り飛ばした。

武器を失った高城はレイコに飛びかかった。

「宅哉くん。今よ」

「はい」

宅哉は後ろから高城に飛びつき、両腕を羽交い締めにした。とても老人とは思えない暴れ方だったが必死に抑えた。その間にレイコが数珠を高城の額に押しつけて経を唱えた。

「高城さん。しっかりして。あなたは強い人だから決して負けない。あなたの力でそいつを追い出すのよ」

「うおおおおお」

レイコの言葉を理解したのか、高城が苦悶ともとれる雄叫びを上げた。

レイコも負けじと大声で経を唱え、最後に気を放った。

「破っ！」

つんざくような悲鳴の後、高城の身体から一気に力が抜けて宅哉の腕に残されたのは、小さな老人の身体だった。

宅哉が高城をそっと床に横たえようとすると、高城の身体から黒く長細い陰がいく本も現れた。

それは身体から這い出すと気味悪く逃げ場を求めてうごめいた。何匹かが向かって来たので、宅哉は思わずレイコの後ろに逃げ込んだ。やがてそれらは暗がりや物陰へと消えて行った。

布団に寝かされた高城は、目が覚めると語り始めた。最初は投資の話だったと。

数日前のことだ。高城の許を二人の男が訪れた。一人は付き合いのある銀行員で山口といい、もう一人はどこか裏の匂いを窺わせる若者で及川と言った。切り出したのは山口で、柏木に商業ビル建設の計画が立ち上がり、土地を担保に投資すれば、五年で倍に膨れ上がるという話だ。具体的な建設計画を及川が語った。だが、もともと山口は出世

欲の強い男で、投資を名目に自分の手柄を第一に考えているのは見え見えだったし、及川に至っては建設の「け」の字も知らない素人だった。とても付き合っていられないと断ると、途端に二人は態度を変えた。特に山口の豹変ぶりは驚くべきものだったという。真っ赤な目をして高城に迫り、終いには訳の分からないことを口走り始めた。恐ろしくなった高城は警察を呼ぶつもりで立ち上がったが、二人に押さえ込まれてしまった。その時の二人の顔は最早人間には見えないほど歪んでいたという。

「きっと、ついさっきまでの俺の顔もそうだったんじゃないかな。あの時以来、俺は俺ではなくなってしまったような感じで、何が起きたのかわからないのだ。本当に済まないことをした」

「いえ、いいんです。それより、その二人のことが気になります。一体二人に何をされたんでしょうか」

レイコが優しく尋ねる。

高城の顔から血の気が引いていく。土気色にまでになった顔色に、宅哉は高城が死んでしまうのではないかと心配したほどだ。

「それは恐ろしいことだった。彼らは私の中に蛇の仔を放ったのだ」

「蛇の仔？」

宅哉はさっき見た気味の悪いあれだと思った。

「そうだ。彼らの身体から巨大な蛇が現れ、俺を締め上げた。そして開いた口に何匹もの蛇の仔を流し込んできた。その蛇の仔は俺の身体の中に巣食い、俺をせっつくのだ。もっと儲けろ、もっと稼げ、他人から金を巻き上げろと」

レイコは悲しそうに小さなため息を一つついた。

「だが、レイコさんが来てくれたお陰で助かりました。それに隣の若い彼も一緒なら、千人力じゃな」

高城はそう言うと、空気が抜けるように弱く笑った。

宅哉は心臓を掴まれたような感覚にとらわれた。千人力とは何のことなんだ。途端、恋太郎の言葉を思い出す。

（利用されているだけじゃないか）

一体どういうことなのか。俺はただの高校生だ。何のとりえもないただの高校二年生だ。心霊体験だって一度もしたことはないし、そんな力があるとは考えられない。だったら何を利用している？ 宅哉の中で疑問が渦巻き、あらゆるものへの不信感が高まっていった。

高城家を辞した後、宅哉は思い切ってレイコに聞いてみた。

「千人力ってどういうことですか」

レイコはすぐに返事をせずに宅哉を見返した。澄んだ瞳はいつも美しく吸い込まれそうだ。だが、その瞳の奥にある思いが宅哉の心をゆさぶる。何を考えているのかわからない。それはきっと、恋とか愛とか、宅哉が想像したいこととは全く別次元の何か。宅哉は質問したことを激しく後悔した。やがてレイコはそっと口を開いた。

「別に。何でも無いわ。私は女であなたは男。ただそれだけよ」

嘘つき。何を隠しているのさ。宅哉の中で再び不信感が高まっていった。

「それより、これから山口と及川に会いに行くわ。もちろん宅哉くんも、ボディーガードとしてついてきてくれるんでしょ」

何がボディーガードだ。宅哉が渋っていると、風がレイコの髪を弄ぶ。乱れた髪をかき上げる仕草に再び心を乱された。

「ずるいや」

宅哉はそう吐き捨てるのと先に立って歩き始めた。

山口の家は柏木駅から徒歩で十五分ほどの、線路を見下ろす高台に建てられた二階建ての一軒家だった。銀行員の家だけあって敷地も広く、周囲の家の倍ほどの広さがありそうだ。和風建築の佇まいは落ち着いた感じではあるが、植え込みが多く建物は二階部分しか見えない。住宅地にあって闇を凝縮したような、ひどく暗い印象を受ける。それもそのはずで家には灯りが灯っていなかった。どこか墓石を連想させる黒御影の塀沿いに中の様子を探ったが、山口宅はひっそりと静まり返っていた。

「留守ですかね」

レイコは辺りを見回した。

「いえ、ここにいるわ」

レイコは何かを感じ取っているのか両腕をしっかりと掴んだまま言った。

「インターホンを押してみて」

宅哉がインターホンを押すと屋内から僅かにチャイムの音が漏れ聞こえた。だが人が動く気配は全くなかった。もう一度押してみたが同じだった。宅哉が帰ろうと言いかけたとき、レイコが門扉に手をかけた。

「何をする気ですか」

「中に入るの」

「ちょっと待って下さい。勝手にそんなことしたら通報されますよ」

レイコは口の端を僅かにあげて微笑み返した。

ある程度想像はしていたが玄関扉に鍵はかかっておらず、止める間もなくレイコは屋内に侵入してしまった。宅哉は暫く玄関前で躊躇していたが、辺りに人気の無いことを確認し、思い切って玄関に踏み込んだ。

するとどういうわけか、レイコが脇に退いて道を譲った。視線が、頼んだわよと言っている。こんな時だけ本当にずるい。

山口の家は中に入っても広かった。玄関を入ると近代的な正面ホールがあり、左は下駄箱で右には三和土の延長がガラスで囲われた中庭につながっていた。銀行員というのはこんな洒落た家に住めるのかと宅哉が見回していると、

「よっぽど悪どいことしてみたいね」

とレイコが呟いた。

正面ホールの先は二階に続く階段があり、右奥の中庭を回り込む位置にリビングに続くガラス戸があった。暗がりの中でそのガラス扉に明滅する様々な光が映し出されている。リビングに置かれたテレビであろう。耳を澄ませば僅かに音声が聞き取れるが、それでも人の気配は相変わらず皆無だ。レイコに即されてホールからリビングに続く扉をそっと開けた。

リビングは十二畳程の広さで扉から正面位置に巨大な液晶テレビがあり、外国のドラマかなにかが放映されていた。テレビの手前には和風の外観からは想像できないモダンなソファースセットが置かれ、入って右手はガラスで区切られた中庭、左手には裏庭が見て取れた。その裏庭を望む窓を見て宅哉は驚きの声をあげた。ガラス戸の両脇に飾りの柱が左右数本ずつ立っている。その左右の柱に男が二人後ろ手に縛りつけられていた。二人はぐったりとした様子で床を見詰めながらぶつぶつと何かを呟いていた。テレビの音声と思っていたのはこの二人の呟きだった。虚ろな目にテレビ画像の光が僅かに映っていた。

「レイコさん。大変だ。急いで下ろさないと」

後から入って来たレイコもこの光景に息をのんだ。だがレイコは二人からすぐに別の方向へ視線を向けた。

「渡」

レイコが向いた方を見ると、渡がソファースに深々と身を預けていた。渡は夏場だというのに全身を覆うようなコートを身につけフードの奥で射るような視線をレイコに向けていた。首から下げた大きな数珠玉の中で、いくつもの顔がケタケタと笑い声をあげた。

「久しぶりだな。レイコ」

「あなたに馴れ馴れしく名前を呼ばれるいわれはないわ」

渡はおかしそうに笑った。

「この人たちに何をしたの」

「何もしていないさ。こいつらから俺のところにやってきた。それだけだ。こいつらはこうなりたがっていたんだ。そうだろう？」

渡は二人に話しかけた。もちろん返事はない。そして渡は愉快そうに笑い、数珠玉の顔もまたそれに倣った。

「こいつらの心には大きな穴が空いていた。だからその穴を埋めてやったのさ。蛇たちを見てみろ。なんとも居心地が良さそうじゃないか」

渡は立ち上がりゆっくりと宅哉の前まで歩いて来た。宅哉より頭一つ背が高く、真っ黒な顔から見下ろす目に宅哉は潰されそうな心地がした。

「お前は何をここにきたのか分かっているのか？」

「えっ？」

「止めて。その子は関係ないわ」

渡がレイコを睨め付ける。

「関係ない？ 何をほざいている。昔の再現をしたいんだろう。だから連れて来たんだろう。違うのか？」

唐突に力強い手が宅哉の首を鷲掴みにした。

「苦しい。放せ」

「お前はこれから蛇に食われるんだ。生け贄としてな」

「な、何を……」

それ以上は苦しくて言葉にならない。

「いい事を教えてやろう。お前はな、器なんだよ」

「離しなさい」

器？

何のことだか宅哉には分からない。渡が顔を寄せて来た。目だけが輝く真っ黒な顔。その目の瞳孔が広がっていく。黒々とした奈落。

「レイコはな、俺の中の蛇をお前に乗移らせるつもりだ。お前という器にな。そのためにお前は連れてこられた」

「止めなさい。宅哉くん。そんなやつの言う事を信じちゃ駄目。あの二人を見れば分かるでしょう」

だが宅哉にはもうレイコの言葉は聞こえていなかった。渡の言葉が宅哉の意識に絡み付き縛り上げる。軟弱な宅哉の意識はそれだけで苦しくてちぎれんばかりだ。

器？

乗り移らせる？

一体何を言っている。

僕は？

俺は？

一体何者なんだ？

潰れそうな意識の中、疑問が次々に頭をもたげ、そしてレイコの不自然な言動が一層それに拍車をかけた。

「宅哉君を放せ」

レイコは渡に満身の力を込めて蹴りを食らわせた。だが、渡は大木のようにびくともしなかった。何度も試したが結果は全く同じだった。

「誰か。助けて...助け.....」

その時宅哉は霞む視界に何かを捉えた。

リビングの扉に寄りかかる恋太郎の姿だった。場にそぐわずイヤホンでスマホの音楽を聞いている。

「よかった。恋太郎。手伝って。一緒に気を放つわよ」

ところが恋太郎は扉の脇に立ったまま素知らぬ顔でスマホをいじっている。

「恋太郎」

「知らないよ。これは僕の仕事じゃない。あんたたちの問題だ」

「ちょっとこんな時に何を言っているの？」

「僕は残った方を相手にするよ。二人がやり合った後なら楽だからね。ついでに宅哉くんも頂いて帰ろうかな」

利用されている。

恋太郎の声が記憶に結びついた。宅哉の中で何かが弾けた。小さな何か。だがそれだけで十分だった。

そうか利用されているんだ。

渡はにやりと笑うと力の無い宅哉を放り出した。

「俺は、俺の中の力を征服し人間以上の存在になった。だからお前達『ただの』人間に指図を受けることなどあり得ない。お前達『ただの』人間どもは俺を敬い、恐れねばならない。俺はお前達が決して倒すことのできぬ存在なのだから」

首の数珠を手巻き直し、山口に向かって突き出した。

「さあ、畏れろ！」

渡が気を放つと急に山口が悶え苦しみ始めた。まるで見えない大蛇にでも身体を巻か

れているのか、ぎりぎり締め上げ骨が軋む音が聞こえた。

「止めなさい」

レイコは渡を睨みつけると数珠を手に巻き前に突き出す。宅哉の方を顧みることもしない。

「臨・兵・闘・者・皆・陣・列・在・前。破！」

渡の顔が僅かに歪む。だがその顔から不敵な笑みが消えることはなかった。苦しみと笑みが混ざり合い、渡の逆梵字が刻まれた黒い顔は鬼神の形相となった。

「効かないぞ。ぜんぜん効かないぞ。どうしたそれだけか」

「恋太郎ってば。破！」

レイコが再び気を放つ。渡の顔が歪むが、依然笑みは消えない。それどころかその笑みはますます顔中に広がっていく。レイコと相まみえるのが楽しくて仕方ないかのようだ。そして今度、渡は数珠を及川に向けた。及川が苦しみの悲鳴をあげる。

「宅哉くん。渡を止めて。数珠を奪うのよ」

渡の数珠の中の顔が一斉に宅哉を見た。そして小馬鹿にしたようにケタケタと笑った。

「いやだ」

「なんですって？」

「嫌だと言ったんだ。僕はそんなことをするのは嫌だ。レイコさんは僕を利用している。そうなんだろう？」

「そんなこと……」

レイコの言葉は小さく萎んで消えた。力強く突きつけていた数珠を持つ腕が、徐々に下がっていった。恋太郎は相変わらず無関心だ。渡が勝ち誇ったように大きく笑った。同時に及川が悲鳴を上げ、何かがバキリと折れる音がした。それが何なのか宅哉には分からなかったしもう関心もなかった。

宅哉は耳を塞ぐと恋太郎を押しのかき振りながら飛び出した。そのまま山口の家から転げるように出て駅に向かって駆け出した。すぐに苦しくなり、空気を求めて肺が燃えるように痛んだ。それ以上に心がずきずきと痛んだ。頭の中で及川の悲鳴がぐるぐると回っていた。全てが終わるのだと思った。

それから一週間。宅哉は部屋に籠もりどこにも出かけなかった。布団をかぶり電話にも親の問いかけにも応えなかった。義母が、学校がどうしたこうした言っていたがどうでもいいことだった。舞台の上で芝居はまだ続いているのかもしれない。でも劇場を出てしまえばどんな物語が繰り広げられていようと関係ない。結末は知らない。知りたくもない。舞台を降りた者に知る権利はない。ベッドからぼんやりと外を眺めているとスズメが飛んでいるのが見えた。自由に空を飛ぶスズメがひどく羨ましく思えた。何にも縛られず、何にもとらわれず。あんな小さなスズメにさえ負けている気がした。自分にも翼があればいいのにと考え、スクーターのことを思い出した。久々に着替えて外に出た。スクーターであてど無く走っているうちに、子供の頃よく遊んだ柏木神社に来ていた。

柏木神社は利根川を見下ろすように奉られている地元の小さな神社だ。鳥居を潜るとすぐ右手に小さな手水舎があり、左手には絵馬が下げられている。手水舎の奥には社務所があり、踏み石を真っ直ぐ進めば観音開きの扉がついた本殿にぶつかる。見渡せる範囲が全ての小さな神社だ。本殿には水神として蛇神様が奉られているが、戦後持ち込まれた雑多な宝物が関連性もなく収められていると聞いた事がある。なかには高価なお宝もあるという話があるが、真偽のほどは確かではない。

宅哉はいつものようにお参りをすると、賽銭箱の前の段に腰を下ろした。ここに来ると何故か落ち着いた。見上げれば青空に雲がゆったりと流れ昨日までの騒動が嘘のようだ。

どれほどの時間ぼうっとしていたのか、ふと気がつくとうるしの脇に白猫がちょこんと座りこちらを眺めていた。

思い起こせば昨日までの騒動はみんなあの白猫が発端ではないか。宅哉はなんだか無償に腹が立って来た。

「おい、お前」

宅哉が立ち上がると白猫は一目散に逃げて行く。

このまま逃してなるものか。宅哉は駆け出すとスクーターに飛び乗った。

白猫は素早く生け垣の隙間に身を隠した。

「逃がすか」

この界限なら子供の頃からよく見知っている。生け垣に潜り込んだ事だってあった。猫ごときに巻かれたりはしない。宅哉はスクーターを発進させると住宅を回り込むように一本先の道に回り込んだ。首尾よくフェンスを飛び越えて白猫が飛び出して来た。突

然の宅哉の登場にびっくりしたのか、白猫は転げるようにして道路を横切り、正面の家の庭先に飛び込んだ。だとしてもだいたいの行き先は見当がつく。宅哉はまたしても白猫の行く手に先回りした。

そうしたことを繰り返すうちに、気がつけば宅哉は高城の家の前まで来ていた。白猫がしたり顔をして高城の生け垣の中に消えていった。白猫を追いつめていたつもりが、こちらがいいように踊らされていただけだと気がつき、己の浅はかさに嫌気がさすと同時に、猫という生き物に畏れを感じた。もしかしたら僕は、いや僕らは動物達の本性を全く理解できていないのかもしれない。

宅哉はスクーターを降りるとインターホンを押した。そうする事が正しいように思ったからだ。清子の声がしてすぐに玄関の引き戸が開いた。だがそこに立っているのは清子ではなく恋太郎だった。恋太郎はいつものようにイヤホンで音楽を聞きながらそっぽを向いている。先日のことを言うでも、入れと言うでもない。宅哉もまた何も問わない。だまって玄関をくぐった。

長い廊下を進む途中、開いた襖の向こうに高城がいた。南向きの日当りがよい部屋に布団を敷き、半身を起こして庭を眺めていた。今しがたまで臥せっていたのだろう。

「来たか」

高城は振り向いて言った。好々爺の面影はなく亡霊に取り憑かれたような、骨張った顔が宅哉を見ていた。憔悴し切った顔だった。傍らにあの白猫が座って同じように宅哉を見ていた。宅哉が黙ったまましていると、高城が近くに座るよう言った。宅哉が言葉に従って高城の脇に腰を下ろすと、恋太郎が後ろで襖を閉め背後を取るように座った。その態度が気に入らなくて口を開きかけた時、高城が絞り出すような声で語り出した。「君が生まれるずっと前の話だ。儂はこの辺り一帯の開発を取り仕切るまとめ役をやっていた。

まとめ役というのはふたつの仕事をしなきゃならない。ひとつは土地所有者と建設会社の調整だ。まあ、大変な仕事ではあるが、長くやっていればコツがわかるようになる。儂は寝食を忘れて働いたよ。その結果がどうなったのかは、柏木駅前の発展を見てもらえれば分かると思う。

だがもう一つの仕事はなかなか思うようにならんものだった。それは、目に見えぬものを相手にしていたのじゃから。自然という目に見えぬ力じゃ」

高城はひとつ、ふたつと乾いた咳をした。白猫がじっとその様子を見ていた。

「この土地に限らず、どこでも必ず地の神様というのがある。その神様はその地に昔住んでいた豪族だったりすることもあるが、多くは太古その地に住みついた動物の霊が時代を経て神に昇格したものじゃ。その霊が土地の気を操り、その土地の性格というのを

決める。だが、土地の性格というのは必ずしも人間の生活に都合のいいものばかりではない。時に自然は荒れ狂い田畑を荒らし、すべてを台無しにしたりした。

だから昔から人々は地の神様を祀り、生活に災いがもたらされないようにしてきた。儂の役目はまさにそれだった。

だが、二百年も三百年も前ならいざ知らず、近年は水害で苦しむことも、動物たちに田畑を荒らされることも無くなった。儂の役目もただの肩書きになりつつあった。

ところがある年のことだった。ある事件が起きてしまった。あれは儂の落ち度じゃった。自然と、そして人間というものを甘く見すぎていたのか。いや」

高城は左右に力なく首を振った。

「儂らはみな亡霊に取り憑かれていたのじゃろう。欲望や恐怖という亡霊に」

高城は再び咳き込んだ。それを聞きつけ様子を見に来た清子に、大きく手を振って、いいからあれを持ってこいと何かを取りに行かせた。

戻って来た清子が大事そうに胸に抱いていたのは、古びて茶色く変色した一冊のアルバムだった。

受け取った高城はぎこちない手つきでページをめくってゆき、ある箇所をめくるのを止めた。開いたページには数枚の写真が貼ってあり、何れもセピア色に変色していた。高城が指差す一枚には五人の男女が並んで映っていた。どの人物も皆一様に和装で、白い袴に足袋という姿だった。

「だれですか？」

「レイコの両親と恋太郎の祖父母たちだ。そして左端にいる女性こそが君の母親の貴子さんだ。君は貴子さんによく似ている」

そこには小柄な一人の女性が写っていた。決して美形ではない。ふっくらと肉付きがよくどちらかと言えば愛嬌があると評される。だがそれでいてどこことなく惹かれる容貌。素直で全てを受け入れてくれそうな優しい目。男なら思わず抱きしめてしまいたくなるような、そんな雰囲気を持つ女性だった。彼女は髪を後ろで一つにまとめ、首からは親指大の水晶玉を繋いだ数珠が下げていた。

宅哉は掴まれたかのように胃がぎゅっと縮むのを感じた。宅哉は幼い頃に今の義父母の家に引き取られ、両親の顔を知らなかった。義父母に訊いても両親は事故で死んだ。写真は一枚も残っていないと言い聞かされて来た。ずっと彼らと生活してきたので、本当の両親が他にいるなどという感覚はもうどこにもなかったし、会いたいとも思わなかった。だがそれでも、こうして目の前に写真を突きつけられると、何か不思議な感情が胸の内で広がるのだ。それを上手く言葉で現すことはできなかった。だがそれは今の義父母に感じているそれとは違ったものだった。

「今更……」

「そうじゃな。今更だ。だが、全く顔を知らないというのも哀れじゃからな」

俺は哀れなのか？

宅哉はそんなこと一度も考えた事はなかった。だがこの広がっていく感情は何なのだろう。

「彼らは儂のところにやってきてこう言った。自分らは地神様を鎮めるために各地を旅している一団だ。この地の神様はどうやら昔この土地に住み着いていた大蛇の霊のようであるが、眠りから目覚め活動を始めようとしている。もし地の神様が活動し始めると、川は氾濫し土地を耕すことも生活することもままならなくなるだろう。自分らが大蛇の霊を鎮めるから雇ってもらえぬかと。

今まで何十年も川の氾濫などなかったし、農業だけで栄えている街でもない。怪しい連中の話を聞く理由も無かった。だから儂は何も考えずに断ってしまった。

ところがその年の秋はひどいものだった。何度も台風がやってきて雨を降らせ、川が溢れていくつも畑がだめになった。しばらくしてまた彼らはやって来た。どうだと言わんばかりの顔で。こうも動かしようのない結果を突きつけられては、彼らの言葉を信じない訳にはいかなかった。彼らは地の神様は今日目覚めと休眠を百年単位で繰り返す。もし完全に目覚めるようなことになれば、被害はもっとひどいものになるだろうし、それが百年に渡って続く可能性もあるというのじゃ。儂は有力者を集め話し合いをした。そして金を出し合って彼らに地の神様を鎮めてもらう依頼をした。

彼らは川を見下ろす神社の境内に祭壇を造り、かがり火を焚いてほとんど飲まず食わずのまま七日間に渡って祈りを捧げ続けた。終わりに近づいた頃、彼らはまるで鬼のような形相になっておったよ。じゃが、途切れることなく続く経文と、夜空に卷上る火の粉を見ていると、何か不思議な力が存在して我らを包んでくれているように感じたものじゃ。そしてその年最後の台風がやってきた。

台風之夜、儂は家に籠っていた。風が出始めたころに門戸を叩いたのは安倍という年かきの男で、一団のリーダーだった。恋太郎の祖父にあたる男じゃ。すっかり頬はこけ眼だけがぎょろりとした骸骨のような姿は異様だった。その彼が儂の顔を見据えてこう切り出した。

おまえこの土地を支配したくないか。

とな」

「支配ってどういうことさ」

「そう。儂も同じことをきいた。すると安倍はこう言った。俺の力を一部ここに残して

いく。そうすることで、いつでも自由に地の神様を操ることができるようになる。都合のいい時に都合のいいように。そう言って安倍は気味悪く笑った。その笑いから僕は彼が何を求めているのかを悟った。安倍は取引を持ちかけていたのじゃ。彼の言う事を聞けば、僕はここで力を手にする。見返りとして五人分の代金を全て自分に支払えと。

当時僕は土地開発の取りまとめ役だった。だが、それではただの土建屋という猿山のボスに過ぎない。まだ僕も若かった。もっと上に行きたかったし権力も手にしたかった。土地を思うように動かせるようになれば、それは政界進出の足がかりになる。他の有力者も出し抜ける。そういった僕の欲望をも奴は見抜いておったのじゃ。当然断るはずもないという確信があったからこそ僕のところへやって来たのじゃ。僕は思惑通り、彼の要求を飲む事にした」

宅哉は徐々に心が冷えていくのが分かった。目の前にいる老人が語ろうとしていうのは決して単なる自慢話ではない。

「何をしたの」

高城の顔色はますます土気色に変じていく。

「僕は渡を裏切ったのじゃ。いや渡だけじゃない。町の人々や君の母までも」

高城は一度天井を仰ぎ暫く記憶を整理するように黙り込んだ。そして一気に語り始めた。その内容は驚くべきものだった。

宅哉は高城の独白を聞くにつれ拳が震えるのを抑えられなくなった。耐えきれず畳に叩き付けた。

高城がびくりと身を震わせた。

跳ねるように立ち上がった宅哉に高城が言った。

「許してくれ」

「あんたは屑野郎だ」

叩き付けるように言葉を発し、宅哉は部屋を飛び出した。

スクーターにまたがったところで恋太郎の姿が目に入った。門柱に寄りかかってこちらを見ていた。

「なんだ。笑いにでも来たのか」

「別に笑わないよ」

宅哉は涼しげな顔が無償に腹が立ち恋太郎を睨みつけた。

「お前の祖父は糞野郎だ。死んで当然だ」

「そうだね。僕もそう思うよ」

恋太郎はこともなげに答えた。

「だが、お前はレイコさんに挑戦状をつきつけて復讐を誓った。なんであんな奴のため

に復讐する？ ジジイどもにいいように振り回されて腹が立たないのか」

「僕はただこんなことを早く終わりにして、自分の道に進みたいだけだよ。僕が一番になってこの力を封印してしまえば、この血筋は消えてなくなる。そうすればこんな争いに煩わされずに好きな事ができるだろ。人生はロックだからさ。そういうものでしょ。人生って」

恋太郎はそう言ってイヤホンを指先で叩いた。

「ちなみに挑戦状なんて時代錯誤なことをやったのは、そうしないとあの人乗ってこないからだよ」

宅哉は頬を張られた気分だった。こんな子供が運命と必死に戦い、自分の道を歩もうとしている。なのに、自分は突きつけられた事実で動揺し、恐れをなして拗ねているだけなのだ。恋太郎は運命と向き合うということをたった一言「ロック」という言葉で表してしまった。自分にあんなこと言えるのか。「人生はロックだ」なんて。「人生ってそういうものだろう」なんて。宅哉は恋太郎の顔をまともに見れなくなってスクーターを発進させた。

宅哉は風に舞う木の葉のように翻弄されつづけていた。終着点がどこにあるのかも分からない。何より恋太郎のように事実を受け入れられない自分に腹を立てていた。帰ってベッドに転がる気にもなれず闇雲にスクーターを飛ばした。導かれるようにして『居酒屋たぬき』に辿り着いた。まだ仕込みには早いので店は閉まっている。それでもなんとなくあのほの暗い店内で座っていれば気分が落ち着くような気がした。

扉をくぐると店内はひんやりとした。電気はついておらず洞窟のような暗さだ。人の気配は無かった。

「店長」

声をかけたが誰も応えない。閉め忘れだとすれば物騒な話だ。後で知らせておかなきゃと思ったところで、自分にもうバイトをやる意志が無い事を思い出した。そう、レイコと顔を会わせるのは辛い。自分は運命から逃げているのかもしれない。でもやっぱり今は無理だと思った。いつか。いつかはいつやって来るのだろうか？

踵を返して帰ろうとした時、店内から何か物音がした。バックヤードの方からだ。驚きで心臓が喉元までせり上がってくる。

「誰かいるの」

再び何かの物音。重たいものが壁を叩くような音。そして暗がりの奥からわずかに漏れ聞こえるくぐもった声のような音。

「誰かいるんでしょ」

宅哉は震えつつも一足ずつバックヤードに近づいていった。厨房を抜けてバックヤ-

ドとの境の扉を開けると飲み込まれそうな暗闇。廊下の電灯を点けようとスイッチを入れるが電灯は点かない。携帯電話を取り出してわずかな明かりを確保する。またしても物音。奥の更衣室からだ。何かが扉にぶつかる音。

一步一步慎重に進んでいき扉の前に立った。そっと耳をそばだてる。どんどんという音がする。間違いなし。中に誰かがいる。

「誰？ 店長ですか」

応えがない。もしかして怪我でもしているのかも。だったらすぐに助けを呼ばなければならない。

再びドアに何かを打ち付ける音。急激に背中が冷えていく。ここは手酌会で『落とし』をしていた部屋だ。もし……

もしなんだ？

俺は怖いのか？

ふと高城の家で見たものを思い出す。レイコが落とした黒く長細い影。あれがこここの暗がりから様子を窺っていた。高城に再び取り憑く隙を今か今かと狙っていたのだ。そちらに目をやればそれはずっと姿を隠してしまう。だが部屋中を取り囲んでいたのを宅哉は知っていた。あれは高城が弱るのを待っている。高城の心には大きな穴がある。高城は渡を裏切り、そして母を欲望の餌食とした。今ではそれを後悔している。だが後悔したところで穴は埋まらない。あれはそれを知っている。高城がやがて自分たちを受け入れるだろうことを知っているのだ。

そっとドアノブを握る。冷たいドアノブの感触が、冷えた心の中をふたたびかき回す。

高城の部屋で高城はこう続きを語った。

「そもそも鎮めの儀式は、地の神様から発する霊力の一部を切り離し、力を弱めたところを封じるか、あるいは貴子のように切り離した霊力を体内に受け入れ、慈悲の力で鎮めるかで行われる。彼らの方法は後者だ。だがそれは貴子という特殊な能力者がいてこそその方法だ。彼女がいなければ成立しない。

そこで安倍は貴子を拉致し、貴子に取り憑いた霊力を渡に移し替える計画を立てた。

ただ、貴子から霊力を切り離すことは容易ではない。彼女の力はそれほどのものだったのじゃ。もし貴子から霊力を力づくで引きはがそうとするなら、貴子の精神を不安定な状態にする必要があった。人というものは精神的に不安定な状況になれば、いとも容

易くねじ伏せられてしまうもの。

儂は」

高城は一旦そこで言葉を切った。天井を見詰める目は恐れに揺れている。一旦目を瞑り開くと、思い切って喉の奥の言葉を吐き出した。

「儂は、貴子を犯したのじゃ」

宅哉が息を飲む気配に高城は再び目を瞑った。目尻から涙の雫が顔を伝った。

「儂は若い連中を連れてそっと祭壇に近づいた。幸いにして渡は祈祷に集中しており、背後で何が起きても気づきそうにはなかった。渡の後に控えていた貴子を数人がかりで押さえつけると一気に祭壇から引きづり下ろし、そのまま神社の裏手まで運んだ。貴子は驚きで何も考えられないのか、ほとんど抵抗をしなかった。何が起きているのか理解できなかったのかもしれない。

そして倉庫に貴子を押し込めるとその場所で貴子を犯した。その時のことは無我夢中であまり覚えていない。ただ、事が終わった時に虚ろに宙を見詰め、裸のまま横たわる貴子が目の前にいるのを見て、不思議に思った。

この女はここで何をしているんだ？

儂はここで何をしているんだ？

そんな非現実的な思考は安倍の登場ですぐに終わった。

安倍は貴子に向かって何か呪文を唱え始めた。

すると貴子が痙攣をおこし、口から何か青白い煙のようなものを吐き出し始めた。

その煙のようなものはしばらく貴子の上を浮遊していたが、何かに引かれるようにして祭壇の方へと流れて行った。

祭壇に戻ってみれば渡が苦しみ藻掻いていた。その姿を歓喜の様で見ている安倍は鬼そのものじゃった。安倍はこの時をずっと待っていたのじゃ。渡というもう一人の巨人が潰れるのを、今か今かと待っていたのじゃ。

儂は渡が苦しんでいる姿を見て見ぬ振りをした。苦悶の声が耳朶を打ち身体が震えたが儂は下を向き渡を見ようとしなかった。

やがて渡はその場に倒れ動かなくなった。取り憑いた霊力に押し潰されたのだろうと思った。だが彼は最後の力を振り絞り、己に取り憑いた霊力の半分を安倍にぶつけたのじゃ。完全に油断し切っていた安倍はそれを防ぐ事もできず霊力に取り込まれてしまった。安倍に取り憑いた霊力はその体をなして大蛇の仔となり、ぎりぎりど安倍の身体を締め上げ、やがてのど笛を食破るようにして体内に入り込んでしまった。蛇の子が取り憑くだけであの苦しみじゃ。大蛇が体内に住み着く苦しみはどのようなものか儂にはわからない。内臓を焼かれるような苦痛を伴うものだろう。とても見てはいられなか

った。まさしく惨状そのものじゃった。

三日三晩彼らは苦しみ続けた。そして最後の晩、安倍は気がふれておかしくなり、渡はこつ然と姿を消してしまった。その後はどこで何をしていたのかとんと分からぬ」

この時よもや渡がどこで何をしていたのかなんて興味がなかった。宅哉は努めて静かな声で訊いた。

「母はどうなったのです」

高城がびくりと肩を震わせた。宅哉の声に初めてその姿に気がついたとでもいうように。宅哉に向けられた目には明らかな怯えがあった。

「それは……」

宅哉は目を逸らさなかった。

高城は観念したように続きを語った。

「彼らは旅の一団じゃ。どこに帰る当てもなかったのだろう。渡は消えてしまったし、安倍はおかしくなってしまったので病院に預けた。もちろん治療費は儂が持った。それも半年で終わった。安倍はやせ衰え最後は笑いながら死んでいったそうだ。

そして貴子はしばらく儂の家に居候として住み着いていた」

「残ったということですか」

「いや、儂がどこにも行かせなかった。儂と貴子は運命の鎖でつながれてしまったのじゃ。

安倍が言うには地の神様を思うように動かすには、貴子との絆を作らねばならない。だから貴子に儂の精を打ち込めというのじゃ。断ることもできた筈じゃった。じゃが、儂はここでも亡霊に取り憑かれていたのじゃ。権力欲という亡霊に」

宅哉は身体が熱くなるのを感じた。怒りではち切れそうだった。

「儂は貴子を犯した。子供を作ろうとしたが、貴子は子をなさなかった。それがどういう力の働きかわからん。運命なのかどうかも。一年の間貴子は儂の家にいたが、ある日うちの若い者と一緒にいなくなった。何年かして森の夫婦が貴子の子供を預かったと噂に聞いた。貴子が病気で子供が育てられないからだという話だった。本当のところは知らない。調べようとすれば調べられた。じゃが、調べなかった。儂は怖かったんじゃ」

宅哉は高城の言葉を頭から振り払った。決して許すことなどできなかった。

どんどんという扉の音で我に返った。

俺はあいつらとは違う。

宅哉は思い切ってドアを開いた。

「店長」

ドアの先には粘着テープで口と手足を縛られた音次郎が転がされていた。ドアを蹴って助けを呼んでいたのだ。

「大丈夫ですか。すぐに解きますから」

宅哉は慌てて音次郎に駆け寄った。音次郎が目を見開いて必死に何かを訴えている。宅哉は辛かったとかそういう事を訴えているのだとばかり考えていた。だが、音次郎は宅哉ではなく後ろを見ていた。後ろで人の気配がした。宅哉は慌てて後ろを振り向いた。

「やあ、待っていたよ」

出口を塞ぐようにして、頭からフードをすっぽり被り逆さ梵字を顔に刻む男が立っていた。渡だった。

渡は宅哉が一言も発することができないうちに、その首を鷲掴みにして締め上げ始めた。

「ようやく俺の許に来たか。この時を待っていた。ずっと待っていた。これで全てが変わる」

気道を塞がれ苦しくなると同時に頸動脈を塞がれ頭がくらくらした。やがて視界が暗くなり始めた。遠くで響く男の笑い声を最後に宅哉の意識は途切れた。

五 落とし

玄関チャイムの音にレイコは扉を少しだけ開けた。チェーンロックが伸び切った隙間から音次郎の大きな身体が見えた。

「ちょっと待って」

レイコは扉を閉めると目を瞑って扉に寄りかかった。

よし、大丈夫。私はいける。

レイコは大きく深呼吸をするとロックを外して扉を勢い開いた。

「行くわよ」

「大丈夫かい？」

そう問いかけてくる音次郎の手首には粘着テープの跡がまだ痛々しく残っていた。

「あら、変わったリストバンドね。流行らないわよ、今時」

音次郎が情けない顔で力なく笑った。

「寄り道するんだろう？」

「そうね」

「いよいよだね」

「そうね」

レイコの思いを込めた目に、音次郎はそれ以上なにも言わなかった。

いよいよ決着を付ける時が来たのだ。レイコは力強く歩き始めた。

音次郎が来る少し前、レイコは己の運命を呪い恐れ戦いていた。なぜ自分なのか。どうしてこんな目に遭うのか。

父である渡の力は強大だった。今のレイコでは全く歯が立たない。

それでも倒さねばならない。実の父を。

なぜなら渡は悪だから。

血がたぎった。

恐れで沸き立った。

身体が恐怖で震えた。見通せない未来。漆黒の闇に続く道。もう二度と日の光を見れないかもしれない。

死ぬのは怖くなかった。

でも、永遠の闇は怖い。

逃げたい。なんでこんなことをしなければいけないのか。

逃げてしまおうか。

この血がなければいいのか。

レイコは台所から包丁を持ち出すと手首に当てた。手首にはもう何本もの線が刻まれている。そんなことをしても何も解決しないし、終わりも来ないことは知っていた。だからレイコは包丁を逆手に持つと胸の前に構えた。一気に突き立てれば全てが終わる。

だが、本当に終わるのか？

レイコは霊が存在することを知っている。肉体が終わりを告げて、靈魂に終わりはない。そこにあるのは永遠の呪縛。それこそ永遠の闇と変わらない。

「あああああああ」

レイコは包丁を振り上げると、一気に枕に突き立てた。そしてまた振り上げ突き立てる。何度も何度も。

それが終わったとき、部屋一面に羽が舞い、レイコは肩で息をしていた。

レイコは包丁をぶん投げた。包丁がぶつかって何かが割れたようだが気にもしなかった。

「やってやろうじゃないの。ぶっとぼしてやる」

そしてこうして今、レイコは音次郎の車で決戦の地に向かっている。後先考えても仕方が無い。己の存在を賭けてぶつかるしか無い。渡は父ではない。悪だ。

彼は思った。何かが近づいている。それが何だか分からない。

耳元で囁く声が聞こえた。

「お前の敵だ」

そうか。敵なのか。そう言われるとそんな気がしてきた。

そもそもここはどこなのだろう。真っ暗で手を伸ばしてもどこにも触れない。足下にも確かな感触がない。全てが朧で混沌としている。

「敵が来る。それだけ覚えておけばいい」

そうか。

ならば安心だ。覚えることは少ない方がいい。

敵が来る。

覚えておくことはそれだけ。

だから近づいてくるのも敵。

だがしかし、再び疑問の泡が沸き立つ。

そもそも俺は誰なんだ？

いや、疑問を持ってはいけない。言われたではないか。俺の敵が来る。それだけ覚えておけばいい。

敵が来る。

敵。

陽が傾き始めていた。山口の家は、そこだけ光が届かないかのように暗く沈んで見えた。生活という日常からそこだけ切り離され、ぽっかりと穴が空いてしまっている。ポストからは新聞が溢れ、落ち着いた佇まいがかえって荒廃した雰囲気を作り出していた。山口には家族がいなかった。だから雑多な荷物が何一つ敷地内に見受けられない。それがまた一層荒涼感を強めている。

レイコは開け放たれたままの門扉を潜ると力強い足取りで玄関に向かった。玄関から霊気が漂うのを感じた。

扉を開け放つとつんと鼻を突く匂いがした。

「まずい」

灯油の匂いだ。

レイコは急いでリビングに向かった。

そこには全身に灯油を浴びた山口が立っていた。手には火のついたライターを持っている。

「やめなさい」

山口が振り向いた。

その顔を見てレイコは息を飲んだ。

山口は笑っていた。苦痛に顔を歪めながら、歓喜の笑みを作っていた。二つの決して混じり合うことがない感情が一つの身体をせめぎ合い、両極端の感情に揺さぶられ震えていた。限界をとっくに乗り越えた山口の精神は崩壊し始めていた。

「頼む。もう無理なんだ」

そう言ったかと思うと次の瞬間には弾けるように笑い声を上げた。

「いひひひ。邪魔をする奴は焼き殺してやる」

レイコは印を結ぶと口の中で経を唱え始めた。

すると山口の中にいる蛇が身悶えをしたのか山口の顔が苦しみに歪んだ。

今だ。レイコは床を蹴ると振り上げた右足でライターをはね飛ばした。着地と同時に山口にタックルを食らわせて灯油の海から外に突き飛ばした。

左手のソファから炎が吹き上がった。レイコ自身山口にタックルをした際に灯油にまみれた。このままだと火だるまになる。よろめいている山口に再びタックルを食らわせ、そのまま窓を突き破って外に転げ出た。

間一髪だった。部屋の中はもうすでに火の海だった。

レイコは息をつく間もなく数珠を山口の胸に叩き付けた。

「悪霊退散。破」

山口が咳き込んだ。咳をする度に口から黒い長細いものがずるずると出てくる。山口に取り憑いていた蛇の霊だ。

レイコが経を唱えると、やがて二メートルはあろうかという蛇がその姿を現し、そして分解するようにして宙に消えて行った。

今や山口の家はもう手も付けられない状態だった。荒れ狂う炎が壁を舐め屋根を焦がした。

転がるようにして道路まで出た所で消防隊員とかちあった。

「大丈夫ですか？ 怪我は？」

山口は一瞬何のことか分からないとでも言うように惚けた表情になった。

火の勢いが増しどこかでガラスの割れる音がした。

音の方を振り向いた山口の顔がくしゃりと歪んだ。涙が頬を伝い落ちる。

「私が...私が火を点けました.....」

山口はそう言うと、その場に泣き崩れた。

消防隊がせわしなく消火活動をする中、山口はただただ泣き続けていた。

「やつはいなかったのかい」

山口を見下ろすレイコに音次郎が声をかけてきた。

「ええ。ここにいたのは彼だけ」

「宅哉くんもか。どこにいったんだろう」

レイコは暫く考えていた。なぜ今回渡は山口に接触したのか。渡の狙いはあらゆる人間に悪霊を取り憑かせること。

「この人は銀行員なんだよね」

音次郎の言葉にはっとした。霊というのは何も人にだけ憑く訳ではない。物にだって憑く。もし銀行から流れ出るお金全てに、渡の仕込んだ蛇の子が憑いていたとしたらとんでもないことになる。山口は銀行の金庫を開けることだってできただろう。そして開け方が分かったから用済みになったとすれば、彼が焼け死んだとしても渡には痛くも痒くもない。レイコと音次郎は顔を見合わせた。

「銀行だ」

銀行はひっそりと静まりかえっていた。窓にはカーテンが引かれ人の気配はまるでない。当然正面玄関には鍵がかかり扉はびくとも開かなかった。陽はすっかり落ち夕闇

が迫っていた。できれば明るい間に決着を付けたかった。夜は人間の領分ではないから。紺色に変じつつある空に蝙蝠が羽ばたいていた。

「裏に回ってみましょう」

「そうすんなり中に入れるとは思えないけど。それに勝手に入ったら不法侵入になるんじゃないのかな。ルールは守らなきゃ。だってそれが大人ってもんだろう？」

行かない言い訳を並べ立てる音次郎を放っておいてレイコは裏口に回った。渡の事だから裏口の鍵が開けられているかもしれないと考えていたが、鍵どころか、巨人の口のように扉が大きく開け放たれていた。人の気配はまるでない。扉の向こうには暗闇。闇を恐れずに入ってこられるのかと、渡が問いかけている。湧き上がりそうになる恐怖を力でねじ伏せ、レイコは真っ暗な蛇の穴に向かって足を踏み出した。

中に入るとひんやりとした空気が二人を迎えた。電気は点かない。左手の警備室の中で何かのランプが明滅を繰り返していたが、警備員の姿はなかった。廊下を少し進んだところに扉と二階に続く階段があった。駅前ビルとはいえ、銀行フロアは二階分しかない。このどこかに渡と宅哉がいるはずだ。どちらに進むか思案していると、背後で鉄扉が大きな音をたてて閉まった。

「開かないよ」

音次郎が泣きそうな声を上げた。

「行くわよ」

右手の扉を開けると窓口がある業務フロアに通じていた。人気のない業務フロアには事務机と十ほど窓口が並んでいた。フロアの所々でパソコンの小さなLEDランプが光るくらいで怪しいものは何もないかに見えた。

ところがフロアに足を踏み入れたと同時に、横から奇声を上げた及川が襲いかかってきた。

「あぶない」

すんでの所で音次郎に突き飛ばされ、及川のバットを躲した。最初の一撃を避けられればこちらにも体制を整える余裕ができる。

レイコが様子を見ていると、及川は手近な音次郎に狙いを付けた。バットを大きく振りかぶる。

「あわわわ」

音次郎は慌てて逃げようとして足を絡ませ尻餅をついた。そのお陰ですんでのところでバットの攻撃を食らわずにすんだ。

及川のバットは事務机の上のパソコンをなぎ倒し、書類を一面にぶちまけた。及川はさらにバットを振り上げると、今度はレイコに向かって来た。攻撃に一貫性がない。

見れば及川は時々喘ぐようにして胸を抑えた。それが何故であるかレイコにはすぐに分かった。体内で蛇が暴れているのだ。及川に残された時間は残り僅かということだ。

レイコは数珠を拳に巻き付けると及川に向かって行った。

及川のバットが空を切った。

その合間を見てレイコは及川の懷に潜り込む。そして下から突き上げるようにして数珠を巻いた拳を顎に叩き付けた。

「ぐっ」

及川の動きが止ったところで数珠を胸に叩き付ける。数珠を通して気をぶつける。

「破！」

「ぐええええ」

及川が苦悶の絶叫を上げて倒れた。胸からは青黒く光る長細い蛇がずるずると這い出してきた。後から後から這い出すその数は優に十匹はくだらなかった。危ない所であった。あのままでは及川は明日の朝日を見る事ができなかったかもしれない。

「ここはあなたたちがいる場所ではない。行くべきところへ行きなさい」

レイコが経を唱えると行き場を失った蛇は溶けるようにして消えて行った。

「レイコちゃん。ちょっと見て」

音次郎の声の方に行ってみるとそこは金庫室であった。本来ならば夜は扉が閉められ、防犯シャッターも下ろされているのだろうが、どちらも完全に開いていた。金庫室の中は三畳ほどの広さがあり、壁一面に鉄の引き出しが設けられていた。今その引き出しは全て開けられていた。つまり中のものを取り出したということだ。取り出した現金はどこにいったのか。一階は業務フロアと金庫室しかない。となると二階に運んだのだろう。

「上に行ってみましょう」

二階に上がると左右に廊下が伸びていた。一番奥にひとつ重厚な扉があり支店長室とプレートが貼られていた。

レイコは直感的にここしかないと感じた。扉を開いたレイコは咂然とした。

支店長室には応接セットと大きな机が置かれていたのだろうが、それらは全て壁際に押しやられ広いスペースが作られていた。その真ん中に即席の祭壇が作られ、真ん中では護摩の炎がごうごうと燃えて天井を焦がしていた。だがこの場合炎を焚いているのは渡だ。護摩の炎ではない。しかも燃えているのは恐らく金庫の中にあっただのであろう札束だった。

渡の脇には宅哉が座り虚ろな目で炎を見詰めていた。そしてそれに連なるようにして見かけない中年の男が一人。風格のある背広を着ているところを見ると、この銀行の支

店長なのだろう。同じく虚ろな目で炎を見詰めていた。

ごうごうと燃える炎のために炎を中心に四方に陰が伸びていた。渡が札束を炎に投げ込む度に陰はゆらゆらと揺れた。

「渡」

渡はレイコを見ると陰湿な笑みを浮かべた。

「遅かったじゃないか」

「あんたの悪事もこれまでよ」

渡は声にならないくぐもった笑い声を上げた。

「俺に勝てないことは分かっているんだろう」

「やってみなければ分からない」

「分かっているはずだ」

レイコは先日の事を思い出した。レイコの攻撃は何一つ効かなかった。渡の肉体は岩の様に固く、そしてレイコの放った気は全て渡の中にある真っ暗な穴に吸い込まれて消えていった。どこにも通じていない穴。どこにも辿り着かず永遠に落ち続ける。

渡の目が大きく見開かれた。その双眸が穴に通じる入り口だ。その目を見てはいけない。

レイコは宅哉に目を向けた。虚ろではあるが意識はある。

「宅哉くん」

だが呼びかけには反応しない。

いや反応した。

宅哉はゆっくりと立ち上がるとレイコにその目を向けた。

その目は渡と同じ真っ黒な二つの穴になっていた。宅哉には渡の放った蛇が憑いていた。

「お前は敵だ」

「なんてこと」

レイコは慄然とした。一人でも手に余るのに宅哉まで。これで宅哉にはもうレイコの気は通じない。気で蛇を落とすことはできない。

炎が爆ぜ、火のついた紙幣が宙を舞った。

壁に映る影が揺れた。

揺れた陰が伸びてレイコの脚に絡み付いた。その陰はいつの間にか蛇に変じていた。蛇はレイコの脚の動きを完全に封じていた。

宅哉が近づいて来て両手をレイコの首に巻き付けた。

「苦しい」

このままではまずい。レイコは懷に入れたものを握りしめると、力任せに宅哉の額に叩き付けた。

「ぎゃあ」

宅哉が悲鳴を上げた。同時に首の手が緩んだ。

レイコはこの機を逃さず、宅哉の首に握りしめていた物をかけた。それは途中柏木神社から拝借してきた親指大の水晶珠だ。元々数珠玉の一珠であり、穴に革紐を通して首に下げられるようにしたものだ。

宅哉は首に下げられた数珠玉に悲鳴を上げ続けた。何とか避けたいのだが首から外すことすらでなかった。宅哉は徐々に弱っていった。

レイコの足には相変わらず蛇が巻き付き動きがとれない。そしていつの間にか目の前には渡が立ちふさがっていた。

「ふふふ。やるじゃないか。柏木神社の秘宝か。だが俺にはあんな物は効かないぞ」

「そうね。あんたみたいなクズには効かないでしょうね。あの数珠が与えるのは母の愛なんだから。あんたにはこれで十分」

レイコは拳を渡の頬に打ち付けた。

渡は僅かに揺らいたが相変わらずその顔には陰湿な笑みが浮かんだままだった。

「効かないと言っただろう」

レイコは拳を胸に打ち付けた。ところがその拳は何の抵抗もなく胸に吸い込まれてしまった。渡の胸には真っ黒な穴が開いていて、レイコの手は肘まで穴に飲み込まれていた。

その穴の中で何か冷たくてザラリとしたものがレイコの手首に巻き付いた。それはゆっくりと腕を這い上ってくる。

レイコの頬が引きつった。

その顔を見て渡が笑みを大きくした。

「レイコ。どうだ、俺と組まないか。お前には俺の血が流れている。その気になれば俺たちは人も金も好きな様に操る事ができる。何でも思いのままだ」

「私たちの力はそんな下らないことのためにあるのではないわ」

「くだらない？何がくだらないんだ。それこそこいつらの方がくだらないじゃないか」

渡は支店長を指し示した。

「こいつらは自分のことしか考えていない。人を平気で裏切りそしてそのツケを俺たちに払わせようとしているんだ。高城を見ろ。あいつは俺に何をした？」

そんなことより二人でこの国を支配しようじゃないか。楽しいぞ。俺はあちこちで種

を蒔いて来た。何れそれが芽生えるときが来る。そうなれば大きな混乱が起こるだろう。その時に混乱を鎮められるのは誰だ？ この俺だ。俺たちだけだ。お前にはその資格がある。お前は俺の娘だからな」

レイコは悦に入っている渡を醒めた目で見詰めた。

「何酔ってんのよ。夢見んのも大概にしなさい。あたしはその血を断ち切りに来たのよ」

レイコはそう言う一気に渡の穴から手を引き抜こうとした。だが大蛇は予想以上に強い力でレイコを引き始めた。このままでは引き込まれてしまう。

「どうしても嫌なら、俺の中で力を貸してくれ」

穴の中で大蛇がぐいっとレイコを引っ張った。飲み込まれる。

その時だった。身体がつよい力で引き戻された。

レイコを音次郎が引っ張っていた。レイコを飲み込もうとしているのは霊力だ。音次郎がいくら力持ちでも人間の力で対抗できるものではない。不思議に思えば、音次郎の後ろには恋太郎がいて同じように音次郎を引っ張っていた。

「何よ。潰し合いを見に来たんじゃないの？」

「それじゃロックにならないだろ。それにこうすれば僕の方が強い事になる」

なんだかんだ言っても手を貸してくれるのはありがたかった。

レイコは二人の力を借りて一気に腕を引き抜いた。腕には黒々と光る大蛇が巻き付いていた。その大蛇をレイコは脇に倒れている宅哉に叩き付けた。

宅哉は苦悶の声を上げたが、それでもその身体に大蛇を取り込んでいった。

「何をしている。そいつを苦しめるだけだぞ」

「そうかしら」

宅哉の首の数珠が白い光を放ち始めた。

「何だこの光は」

「あら、あなた柏木神社の秘宝が何だか知らなかったの？ あれは宅哉くんのお母さんの形見なのよ。あの数珠にはまだ十分な気が残されているわ」

「なんだと」

光は益々強くなり部屋を煌々と照らした。その光は宅哉の中の暗闇を全て照らし出し、そして巢食っている蛇の霊を浄化していった。部屋の中は眩い光で満たされ、全ての影が消え失せた。もはや悪の炎で創られた影などどこにも存在しなかった。

「あとはあんたをぶっ飛ばすだけ」

レイコの脚の蛇も消え去っていた。レイコは満身の力で数珠を巻いた拳を渡の顔面に叩き付けた。

「ぐわあ」

渡は背中から炎の上に倒れ込んだ。

「引きずり出した蛇はあんたの力の源だった。それを失った今、あんたには何の力も残されていない。どう、ふぬけになった気分は？」

渡の顔が驚きで歪んでいた。

「俺は、俺は人間以上の存在。誰にも倒せない」

「そうね。今までのあんたは確かに強かった。今のあんたは私たちと同じ『ただの』人間よ。私たちが敵わない相手。私たちが畏れないといけない対象。それはあんたではない。自然そのもの。あんたはただその力を借りていただけ。それを気づきもしないなんて哀れとしか言い様がない。まるで自分自身に力があり、特別だと勘違いして。自分と変わらぬ人々を見下して虐げたあんたは愚かだった。

でもどう？『ただの』人間だと気がついた気分は。あんたは特別でも何でもない『ただの人』なの。そのあんた自身の傲慢があんたを倒す」

渡は訳が分からないという顔をした。だがすぐにどういう意味なのかを悟った。

渡の胸に開いた真っ黒な穴が渡自身を吸い込み始めた。その穴は蛇の穴だ。宿主がいなくなれば代わりを求める。

「止めろ。そんなことさせない。俺にはまだやることがある」

だが伸ばした手はレイコには届かず、穴に吸い込まれた。必死に抵抗するが、穴は渡の腕を少しずつ、そして確実に飲み込んでいく。渡の顔からは完全に余裕が失われていた。

「人間よ。畏れなさい」

腕は肩口まで飲み込まれ、渡の身体が不自然に歪んだ。続いて生木を裂くような音が響いた。肩の骨が砕けた音だった。それを契機に渡は全身の骨を砕かれながら、己の胸に開いた真っ黒な穴に吸い込まれていった。

「うあああああ…」

やがて渡は自分自身に開いた穴に全て吸い込まれて消え去った。

「終わったわ」

暫く部屋には沈黙が流れていた。

「なら僕は帰るよ。あまり遅くなるとお母さんが心配するからね。僕たちの決着はまたそのうちということで」

恋太郎はイヤホンを耳にはめると手を振りながら出て行った。

支店長室には俯く宅哉、成り行きを見守り胸をなで下ろしている音次郎、何が起きた

のか理解できていない支店長、そしてくすぶっている札束だけが残されていた。

「宅哉くん大丈夫？」

「あの、すみません。どうしてこんなことになったのか分からなくて」

「いいのよ。私たちも言っていなかったことがあったし。さあ、顔を上げなさい」

宅哉はゆっくりレイコを見上げた。途端顔を赤くして横を向いた。

「あの。前、はできてます」

数珠玉を取り出した時力を入れすぎたのだろう。白い和装の胸元がすっかり開き下着が覗いていた。

「ばか」

六 エピローグ

宅哉はスクーターを『居酒屋たぬき』の前に止めると感慨深げに看板を見上げた。なんだかんだいろいろあった。恐ろしい目にも遭った。そしてレイコに対しての想いは出会いの時とは違ってしまったけど、それでも心の大部分を占めていることには違いない。

宅哉はバイトを辞めようと思っていた。本来の目的はスクーターの修理代だったのだから。

思いもしなかったことだが、彼らと出会ったことで母について少し知る機会を得た。母は特殊な世界に住んでいた。そして自分もまたその血を引いている。

だが、母は側にはいない。今宅哉を息子として育ててくれているのは、義父と義母である。彼らとの生活は母のそれとは違う。自分もまた彼らとの生活を望んでいる。たとえばそれが退屈な毎日であろうと。

いつかお酒が飲めるようになったら、ここへ来て昔話に花を咲かせるのもいいだろう。その時はレイコに、純朴な高校生だった自分が何を感じ、そして何を決めたのかを話せるかもしれない。

そんなことを考えながら宅哉は『居酒屋たぬき』の暖簾をくぐった。

「今日でおしまいです」そう言うつもりだった。

「あら宅哉くん」

白いブラウスに黒いエプロン姿のレイコにどきりとした。

「あの、話があるんです」

音次郎が出て来て神妙な顔をした。多分宅哉が切り出そうとしていることはもう想像がついているのだろう。

「今日でバイトを終わりにしたいのですがいいですか」

音次郎はしばらく天井を眺めていたが、にこやかに言った。

「いいよ。宅哉くんはこの半年で随分と成長したよ。自分の道は自分で決めなきゃ。だってそれが大人ってもんだろう」

「さみしくなるわね」

「いじめる相手がいなくなってですか」

宅哉がちゃかすと、

「ぶつとばすわよ」

とレイコが返し、三人で笑った。

「そうだ、これ返さないと、と思っていたんです」

宅哉は首から数珠玉を外してレイコに差し出した。なんだか急に恥ずかしくなった。

レイコも宅哉の顔を見て、やや顔を赤らめた。

「それは持っていないさい。お母さんの形見でしょう」

「だって、柏木神社の秘宝なんですよ」

「大丈夫。住職さんにはちゃんと説明しておくから。逆に私の方から返さないといけないわよね」

レイコは奥の道場から取って来た物を宅哉に手渡した。それは同じ水晶の数珠玉だった。

「えっ？どういうことですか。なんでレイコさんが数珠玉を持っているんですか」

「実はね」

レイコは今日も窓枠でまどろむ白猫を指差した。

レイコが白猫に弟子入りした時に渡されたのだそうだ。

するとそれを見ていた音次郎が、

「ちょっと待って」

といって奥でがさごそ探しものをすると戻ってきた。

「あった、あった。はいこれ」

音次郎が宅哉に手渡したのもまた同じ水晶の数珠玉だった。これで数珠玉が三つになった。

「どういうこと？」

音次郎もまた白猫に視線を飛ばす。レイコを雇う前に白猫が啜えてきたのだそうだ。

そもそも今回この店で働くことになったのは白猫を避けたことが始まりだった。

「もしかして僕はあの猫に操られていたんですか」

「僕じゃなくて僕たちだね」

音次郎が何を理解したのか大きく頷いている。

宅哉が高城の家で見た母の写真。写真の中の母は粒の揃った数珠を首にかけていた。そして今手元には三つの数珠玉。他の珠の在処を知っているのは恐らく白猫。きっと白猫は宅哉の母に何かを託されてここにいるのだろう。それが何だか宅哉には分からない。そして全ての数珠玉が揃った時に何が起こるのかも分からない。ただ、気持ち良さそうに眠っている白猫を見ていると、そう悪い事ではないような気がした。

「師匠。一体どういうことなんですか」

レイコが窓辺の白猫に詰め寄ると、白猫は唐突にジャンプしレイコに飛びついた。

「きゃあ」

白猫は余裕の動きでレイコを飛び越して出口近くに飛び降りた。

被害を受けたのはレイコだった。白猫を避けきれずに尻餅をつき、スカートがめくれてしまった。

「あ、白」

宅哉と音次郎が同時に声を発した。

レイコがスカートを戻しながら睨みつける。

「ぶっとばす」

白猫は「ニャア」と一声鳴くと僅かな戸口の隙間から軽快な動きで店を出て行った。

季節は秋になっていた。少し涼しくなった風が『居酒屋たぬき』の暖簾を揺らす。この店を訪れる人は様々な悩みを抱えている。そして再び暖簾をくぐって出て行く時、どんな顔をしているのかもまたそれぞれだ。

だが、それでも、ほんの僅かでもこの暖簾をくぐって出て行くときに、晴れやかな顔をしてくれる人もいる。少しだけその人たちの役に立てたことは、宅哉にとっても心の支えになるだろう。自分自身はどうだったのだろう。不安な顔をしてこの暖簾をくぐった高校二年生。ここを出て行くときに自分はどんな顔をしているのだろうか。

「それじゃあ」

言って宅哉は暖簾を押して外に出た。白猫は見当たらなかった。

気持ちのいい空がどこまでも広がっていた。

終わり

たぬき横丁怪談ばなし

<http://p.booklog.jp/book/106692>

著者 : kitaryuto775

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kitaryuto775/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106692>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106692>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ